世界婦人

○本號重要記事……伊三坊（木下尚江）……戀か魔か（帆雨）……伯父か甥か（シルレル作 神崎忱鶴）……我が信我が神我が道（元救世軍士官の告白）……動物の相互扶助

修養論を排す

石川生

▲修養は吾等の敵である

今の世の修養は成功家の喜ぶ泥棒術である。今の世の修養は偽善者の喜ぶ詐欺術である。今の世の修養は壓制者の喜ぶ拘束術である。吾等は其壓制の鐵鎖を切斷しなければ人生の自由を實現することは出來ぬ。偽善の假面を剝去らなければ人生の面目を打開することは出來ぬ。成功の私慾を撲滅しなければ人生の粹美を發揮することは出來ぬ。修養は吾等の敵である。

▲修養は殺害の秘訣である

世の教育家、宗教家、道學者、口を開けば曰ふ、修養！　修養！と。壓制者の犬となれる教育家には是れは唯一の戰術である偽善者の典型たらんとする宗教家には必須の信條である。成功家の幇間たる道學者には最上の妙案である。蓋し修養は人間を器械に仕揚げんとする方便に外ならぬ。人間に細工品作を施さんとするに過ぎぬ。角を矯めて牛を殺さんとするに過ぎぬ。生きた人間を鐵の鎖で束らうとするのである。修養は青年男女を殺すの秘訣である。

▲修養は青年殺戮の兇器也

今の新聞は毎日人を殺す。今の家庭は毎日子女を殺す。今の社會は毎日同胞を殺す。今の學校は毎日學生を殺す。而して最も多く殺さるゝ者は青年男女である。而して青年男女を殺すものは修養論である。世の識者は言ふ、近時人口の繁殖甚しと。所謂人口とは人の口のことであろう。成る程、死人の繁殖することは近來益々夥しい。「口」といふ器械は益々増加するに相違無い。併しながら試みに活きた眼を開いて、今の世界を見渡せよ、活きた人間は毎日夥しく殘殺されつゝあるでは無いか。今の新聞は成功者といふ泥棒を稱揚する。今の家庭は勉強家といふ奴隷を愛好する。今の社會は敏腕家といふ詐欺師を讃美する。今の學校は官吏を作る。軍人を作る、會社員を作る、商人を作る、詐欺師を作る、泥坊を作る、馬鹿を作る。併しながら人を完成しやう杯といふ心掛や設備は毛の頭ほどもありやしない何れの方面を見ても、人生は殘殺されて堵の如く山の如く築かれて居る。今日は是れ人生殄滅の時代と申すべきである。修養論は殄滅時代が有する最大最利の兇器である

▲墮落は修養の結果である

基督耶蘇は何と言つたか「新らしき布を以て舊き衣を補ふ者はあらじ、蓋つくろふ所のもの反つて之を壞り、其綻び最も甚だしからん」と、世の修養論に對して一大鐵槌を喰はした所である。修養は接ぎ剝ぎである。現在の衣が尚は人の身體に合ひ、尚は着用に堪ゆる時であつたなら、接ぎ剝ぎも或は多少の効があろう。ケレど今の世に新たに生い立つて來る青年に合ふた丈夫な衣服が何處に一枚でもあるか。今日普通の思想、習慣、道德、文物、一切のものは皆な青年男女の着用に堪えざる舊衣ぢやないか。破れよ、棄てよ。舊き衣服は皆な之を破棄し去れ。新人の着用すべき衣服は新布を以て作らねばならぬ。今の教育家や道學者は眼を丸くして青年男女の腐敗墮落を叫んで居る。誠にお氣の毒な次第だ。が併し其罪は抑も誰にある。舊き衣を新布にて修繕しやうと欲した結果、舊衣が破壞された。是れが所謂腐敗墮落である。腐敗墮落は修養の結果ぢやないか。

▲火を投ぜよ

「新しき酒を舊き革嚢に盛る者はあらじ、若し然かせば嚢はりさけ、酒もれいで、其嚢も亦壞らん、新酒を新嚢に盛れなば兩ながら存つべし」事實は三千年の古から既に明白である。新精神は活潑々として動いて居る。新酒は烈々として醱酵して居る。修養の、道德の、風教の、慣習のと囈語を繰返へして居る時代ぢやあるまい。今は修繕の時代ぢやない。破壞の時代である。發動せる新精神の中に新信仰の火を投じないか。新精神の醱酵は是れ燃えんが爲めである。舊衣舊嚢を破壞すべき火を起せ。舊道德ぢやない。新信仰である。修養ぢや無い。革新である。

米國のプリマドンナ（第三面參照）

エンマ・イームス女史

▲利己主義の產物也

墮落と呼ばるゝを恐るゝ勿れ。腐敗と言はるゝを厭ふこと勿れ。青年男女斷じて修養論を避けよ。道學者に背を向けよ。教育家の言より耳を拭へ。宗教家に向て目を閉ぢよ。青年男女天眞の人格は唯だ新信仰によりて築かるべきである。新信仰に生れし人格は革新によりて完成する。修養ぢや無い修養は新人格殺戮の劍である。

今の修養は利己主義の產物である。已れ一人偉大なる人物たらんとする方法である「偉大なる人物たらんとする」ほど非社會的な、非信仰的な、非人情的な、不自然な考えはあるまい。『偉大なる人物』とは多く盗む人物のことである。多く人を壓する人物のことである。自己以外に何物をも認めざる非信仰的非社會的なる人物である。不人情不自然なる人物である。有害無益の動物である。厄介なる代物である。世にモシ罪惡てふものありとすれば、『偉大なる人物たらんとする』ほどの大罪惡は無い。

▲大人物と修養

「大人物たれ」と教ゆる修養論者は人を煩悶の猛火に投じて顧みざる薄情者である。信仰あるものは大人物たることを要しない。唯だ及ぶだけ世の革新の爲に心身を傾け盡せば足るのである。誤解する勿れ。自ら世を革新せんとするのではない。已れ先づ大人物たらざれば、世の改革など思ひも寄らず杯と聲言するものは、即ち改革の功名を自ら私せんとする野心家である。世は如何に成り行くべきかと研究の目を開くは善し。世を如何に改革すべきかと考ふるは是れ『偉大なる人物』の野心である。世間一般は甚だ迷惑千萬である。修養は即ち此大人物建設の手段じやないか。

▲大人物たる勿れ

吾等は「大人物たらんとする」を排斥すると同時に、其大人物を崇拜することを卑しむ。人が其同胞に感謝するは甚だ美しい事である。乍併之を崇拜する程ど下劣なことは無い。修養を努むるは崇拜を受けんが爲である。卑劣至極なる根性である。大泥坊となり、大詐欺師となり、大壓制者となり、而して天下萬人の崇拜を受けんと欲するが如きシミタレたる根性は青年男女が斷じて持つべからざるものである。

▲寧ろ失敗に生きよ

吾等は修養する前に先づ社會の爲に努めねばならぬ。大人物たらんとする前に先づ同胞に感謝せねばならぬ。吾等は今日の如き社會に當りて我が修養などに沒頭して居る暇を持たぬ。修養に沒頭する者、幸に半途にして斃れざれば或は大人物となるかも知れぬ。乍併、彼は其時消極的に死せずして却て積極的に死んだのである。成功の下に死んだのである。吾等は成功に死せんよりは寧ろ失敗に生きねばならぬ。

○本號重要記事……西洋文學と婦人の効績……理想的婦人國（東京府下一女教師）……婦人と演藝（ロス井ダ尼の効績）……卒業生の告白……婦人の價値變動

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

西洋 文學と婦人の効績（二）

帆雨樓主人

▲歐洲大陸＝ボロナ大學

歐洲大陸に於ける婦人の文學的興發は秩序的に非ずして寧ろ常に斷片的であつた。女孔の心理的能力は繼續的に世に現はれず亦承認せられなかつた。唯だボロナ及びパデウアの兩大學に於ては、カロライナ・ボアヽード や ナポレオス・ピートラクレの記錄によりて聊か其例外の事實を知ることが出來る、而して其等の事實中で、最も光彩ある事蹟したる者は、ローラ・カセリン・マリア・バツシ（一七一一－一七七八）及びクロテルダ・タムブローニの事蹟是れ。前者は一七三二年四月十七日ボロナに於て、哲學上の公開議論を試みた、次で五月、自ら哲學の試驗に應じた、其結果、公職の式服は彼女の身に着せられ　銀の冠は彼女の頭に加へられた、ボロナ市會は彼女の爲に恩給年金を決議した。彼女はドクトル、ベラチと結婚した。一大家族を背負ひし彼女は實に稱揚すべき主婦であつた。而も彼女はボロナ大學の實驗哲學教授に任せられて、此處に教鞭を執ること二十八年、且つ此間に於ても彼女自ら曾て研究の課程を離れなかつた

クロテニダ・タムブローニ（一七五八－一八一七）はボロナに生れた。タムブローニの家に有名なる學者アボント教授が下宿して居つたが、彼女は其人の日誦に常に耳を傾けて遂に希臘語を修得したといふことだ。アボント教授の力で、彼女はマダ少女の身でありながら　初級の希臘語の教師となり、而して後には、完全のプロフエツソルとなつた。實は此時、數名の卓越せる婦人は同大學の稱譽を受けれ、以上の事實によりて見れば中世の伊太利婦人の智識狀態が、他所に於て決して見る能はざる程高所に上達して居たといふとは疑ふ餘地が無い。

▲マダム・ド・セヰーネ

佛蘭西のオーガスタン時代、即ちルイ十四世時代に於ける時代趣味と風俗とが、彼の尊息女に宛てたる書簡を受ける一婦人によりて能く顯現せられたと言ふとは、面白い事實である。當時尚ほ、ファナユールや老バルザックの様な書翰家があつて非常に稱揚せられたのであるが、今は人に讀まれず忘れられて了つた。併し、マダム・ド・セヰーネ（一六二七－一六九六）のものばかりは猶は人に讀まれ、翻譯もされ、英國に於ては猶は後年に至りて、ホレース・ワルポールやメリー・ナルトリー・モンタグの書翰文の手本とせられた。ワルポールに同じく彼女は單一なる感覺を以て事を描寫し、些細なる事にも不滅の永生を賦與するのであつた。彼女はラシーンの事を「彼はカフヰーの香の如く去來する所の香味を示現する」と言ふたが、彼女自身も之と同じく其文學的鑑識は時に確然として居なかつた、彼女は往々他人の不幸よりして樂みを得ると言ふ樣な、無感覺にして殆と冷酷な性質を表して居る。彼女の文章は公刊の目的で書かれたものでは無かつた、又、實際彼女の一六九六年に死去せし後三十年を經過する迄は世に行はれなかつたのである。

▲スクドリ

此の他、なほ佛國に光榮ある一婦人があつた。マドモアゼル・ド・スクドリと言ふ（一六〇七－一七〇一）當時、婦人にして男子の名を以て著作を爲し、以て男子の文學上の名譽を助成した婦人が引續いて現はれたが、スクドリも亦其一人であつた。スクドリの名を署した著作は頗る多いのであるが、其當時は其等の作物は彼女の兄弟ジョーヂとの共著であると言はれて居つた。然るに時の經つに從つて其作物は大抵皆彼女自らものしたのだと言ふとが分り、又、彼女の同胞が遊歩に出かけて行く時などは何時も彼女をして其著作を書かしむる爲に書齋の中に閉込めて出たと言ふことである。其作物中 Artamène ou le Grand Cyrus 及び Clélie 等は蓋し著名のものであつたろう。彼女はパヂロアのアカデミの一員に選ばれ、瑞典のクリスチアニアからは彼女自身の肖像を贈られ而してカルヂナル・マザラン及びルイ十四世より恩給金を給せられた。或時彼女が兄弟と共に旅行した際に一齣劇を演じたとがある。或る旅宿で小說中の主人公を毒で死なせやうか、又、劍で死なせやうかに就て兄弟と大に討論した、其時兄弟の言葉中に「イヤまだいかん、何時でも殺ふ時に殺けるでは無いか」と言ふ一節があつた。所が之を立聞した奴があつた。之を宿屋の主人に告げた。主人は驚いて警察に急訴した。而して遂に此二人の小說家は嚴重なる警戒の下に巴里に護送された。當時の婦人にして、スクドリ程に當時の單調な、寂しい娘的生活に興味を與へた者は蓋し他に無かつた。

▲シユルマン

アンナ・マリア・シユルマン（一六〇七－一六七八）はスクドリと同時の獨逸婦人で、其修學に就ては驚くべき傳說を有つた人である。彼女は未だ一少女の時代に既に多少音樂や繪畫や彫刻を學び、相繼いで總ゆる藝術に精通するに至つた。彼女は一種の眞珠を手製にしたが、其眞に迫れることを之をピンにて刺し得るので僅かに其眞物と判別し得る程なりしと言ふ。彼女はラテン語や希臘語やヘブリユー語や佛蘭西語や英吉利語や伊太利語を書き且つ話すと自國語に於けると異ならず、加ふるに獨特の東洋語までを修めたとのことである。彼女は全歐洲の學者と交通した。「De Vitæ Humanæ Termino」といふ一論文を書いた。彼女はまた有名なる神秘主義者ラバヂーに反對して、其反駁文を書いた。（未完）

卒業生の告白

（女の叫び）　女學生

私共の敬愛する姉樣、私共は卒業するのでございます。いいえ、高等女學校を卒業するのでございます。何樣は私共に一個卒業だそうでお目出度うと申されます。けれども私はちつとも、よろこんでは居りません。一度私共の境界にお立ちなすつた姉樣はきつと私共に同情をよせて下さいますと思ふのでございます。私は嬉しいといふよりは寧ろ、哀しい様な感じが溢れて居ります。どうして卒業式の名に滿足の嬉しさみが浮ばれませう、人はいざしらず、私は決して微笑むとは出來ないのでございます。何故つて今まで最も神聖の理想の活動するとの出來る學生生活を弔られるのでございますもの、冷たい、凄い、社會の黑い手は、私共を拉して罪悪のわだ、罪の深淵に、汚世の汚れにしまぬ私共を連れて行かうとしてゐるのでございますもの社會は私共の少しの瑕瑾を見てはあらゆる雅舌を逞しいまゝにしながらしかも御私共に對して多大の要求を持つて居りまする。私共はいかに多大の要求を受けられても決して不平なんか致しません、私共の困難なとは修養が足りないと思つて、あらゆる努力を致したいと存じます。けれどけれど、陰險なる手段をもつて私共を否應なく壓迫せ樣とするのでございます、口惜しいではございませんか。

姉樣、第一に「あなた方は女だ」と申します。女！！女！！私共は女です。私は眞實の女になりたいが爲に私は教育せられたのです。溫順といふ意味は斷じて壓制をしのぶ名といふとではないと私は申します。家庭は社會は女だと衝突して何が出來るものかといふ口吻を洩します。頭腦の組織だつて男子に劣るぞ申します、それは確かに誤解です。人は曾より、社會に名のあつた女子の少ないといふに結論しますけれども何といふ淺薄な考へでございませう、もとより男子が社會の表に立つて活動する長所を持つて居るのでございますもの、かゝるは自然の數ではございませんか。

それに、私はどうしても現代の女子は己の位置を自覺せねばならぬと存じます。姉樣、私共はもとより時代の勢の大なるを無視する者ではございませんがやがて時代は私共に今少し同情してくれる様になりませう。けれども其時は私共が作らねばなりません。私は甘んじて時代の推移のかくれた犧牲者の一人として人知らぬ深山里にそゝぐ涙を十年後、二十年後、三十年後百年後の女子の爲に捧げませう。それで私は一生を終りませう。――けれど、姉樣、私共はまだうら若き少女です。涙を持つて居るのでございますよ。熱い〳〵血も小さい胸にたぎつて居るのでございます。この血と、此涙とを何處にやらうかと思ふこともありまする。我が周圍には私に同情してくれる人は一人もありませぬ。夜半つめたいしとねを抱いて、そゞろそゞめく憧憬の血を葬らうと闇に深い太息をついたは幾度でございませう。姉樣、しかし私は壓制せられても、默從するとは出來ません。私は反抗の刄をとぎます。そしてわが理想の爲に奮鬪したいと存じます。

曾てかの校庭にて社會の壓制を痛論した私共は今互に別れ去るのであります。姉樣も私共の上に幸ある樣に祈て下さいまし。あゝほんとに四年の學窓は夢でございました。美しい清き夢でございました恐らく私共の生涯に於ける最もうれしい追懷の多き時でございませう。私はいま學校生活を辭するに當り、いふべからざる感想の浮ぶを覺えます。それにしても全國の高等女學校より吐出れる方はそれ程多でございませう。其方々は果して如何感じを持て居れるか。さらば、姉樣。私共は武裝して社會に見えませう。そして明日自己の力を探て社會の爲、女子の爲我所信に向て進みませう。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

理想的婦人國

大賀白牛生

△南國の孤島△無政府的自治村△當開的婦人△未婚者の情夫は當例△結婚の絶對的自由△墮胎△パンの自由

謹啓貴社益々御健康の趣、奉大賀候、降て小生儀てより社會主義に動され、次に貴社の主張に對しても多大の同情を表して已まぬものに御座候處去る一月下旬東京より當地へ渡來致し、目下村額を集めて一ヘルバルトの資料を致し居る次第に候、在留日數淺く、未だ詳細なる見聞はなし不能候へども概要の點だけ御參考まで申上度、不文をも不省左の如し。

南洋の孤島八丈島と隣りの、小島あり、小島と稱す、此者鎭西八郎爲朝が弓をひきて敵を指武笠を響れせしめたりとか、歴史上有名なる所なりと云ふ今や理想的婦人國として予が敢て同志諸君へ紹介せんとするものとなれり、此島二村に分れ、人家七拾戸、人口三百七拾余あり、然るに巡査無く、僧侶無く、醫師なく、時代的文明の或ものを欠くと雖も、二個の寺小屋式小學校を有して　五十六名の學童を通學せしめつゝあり、人情至つて淳朴にして、生活程度低し島人の常食は甘藷、里芋を主とし、米は内地より買來るも、日常用ふるもの甚だ稀なりトコロテン草、鰹節の産ありて東京に出す

此島に社會組織に於て富の壓制より生ずる貧民なるもの一人も無きは悦ばしき限りなり、予は如斯き無政府的自治村落に入りて多大の趣味を感じ　尚婦人問題の理想的解決が雜作も無く實現されつゝあるに驚けり、島の習慣として、婦人は頭上に物品を載きて運搬するが故に、頭髪は後頭部に於て束ねたるまでにて路傍の美は只清淨なる丈なす長髪にそのみ簡素の束髪に結び一條を網ひ、一見甚だ拙けれ　内地ハイカラ黨の喝采に値する位なれども、予の深く感せしは島人のすべてが體格强健にして「若見せ」のするコト、殊に婦人に於て然るを見る、農作勞働は婦人によりてなされ、男子は手傳に止まるので、コノ獨斷的にして「若見せ」する、體格强健なる島婦人は　廣き日本に於て最も幸福なるものと信せしが、尚より以上の幸福と權利とを有しつゝあるを知るに至り　予が數年前讀みし「理想鄕」の一齊に思ひ及ばざるを得ざりき。

島の婦人問題は如何に解決されたりや、曰く戀想・自由の最も尊重せらるゝにあり未婚の女子にして情夫なきもの殆んとなく其結婚は交情の圓熟せる時に於て行はれ、如何に父母親戚の異議あるも一段自己の意中の人とは結婚せでは止まぬが常なり、新婚は實に美しき戀自由主義の弊として一婦が數人の情夫をなして青春の歡樂に醉ふものあれども一旦結婚せば、其夫に貞操を盡すこと驚く程也、然れども何等か事情の爲に離婚すれば赤間も無く情人を見附けて情肉合致の滿足を待つゝあるは面白きことにあらずや内地の如き年若き日除者は一人も居らざる也。離婚の數は甚だ少く一度結婚すれば時に愛情の冷熱するありと雖も如何にして愛情を永續すべきやにつきて、注意するもの、如し年の甚だ差ある夫婦は稀に見る處にして、白髪禿頭の老人に配するに妙齡の少女あるを聞かず、兩性の合歡問題は畢竟するに淡純なる思想即ち愛情の有無によりて行はれ、内地人の如き利害問題を主とせるにはあらず、彼の白刃ひらめき鮮血ほとばしる底の慘事は其例なしと聞く情死なく、駈落無し、否其必要を見ざるが故ならん。

青春の血沸く未婚の女子は佳人を我屋に迎へて愛の滿足を得つゝあるも、兩親の干渉少しもなく、中には其利便と好機會とを與ふるものもあり、如斯結果として姙娠するもの近年までは墮胎によりて闇より闇に葬りつゝありしも、教育とかの進步につれて墮胎の罪惡なるを知り其惡風は今や地を拂はんとしつゝあり。

此島婦人は光榮ある愛の自由を自己の權利とし、大膽に行ひ居れるは慣習の然らしむるとは云へ其最大原因はパンの自由を得つゝあるが爲なり、生活の自由が獲得さるゝが故也、其理由如何と云ふに内地人は米を常食となすも島人は甘藷里芋を常食となし、其費用僅に一日二三錢にて事足り得べく、婦人としても自活すると易々たるがためなり、尚虛榮の夢に迷ふハイカラ女子なるもの無く、保守的なれども淳朴溫良なる「若見せ」する島婦人の身の上こそ賞すべき點甚だ少からず、要するに島の婦人問題は自由主義の戀愛而も利害關係を眼中に置かずしてこそ愛情の有無によりて合離するの美風は實に理想が要求する當面の好果にあらずして何ぞや　(終り)

海濱小品

好濱郞

○煙

夕暮れF兄と二人で濱邊を散歩した。此町の町はずれ、興津川の渦に入るたの形のいゝ一叢の小松林に、今一筋の白煙ほの〴〵と立ち上つて、其の小松林の背にそゝり立つて居る黑ずんだ愛鷹、嶺を縫ひ、紫色に暗くなつた富士にかゝり、遂に紺色の空に消へて行くのを見た。夕風の海面は薄く暗くなつて來る、淙々たる波の音に交つて二人が踏む足音の寥寂たるを聞くのみ無限の靜かさを感ずる。

白き煙は尙ほ、ゆるやかに上る、ゆるやかに動く、のどかにさまよふ、而して遂に悠然として消へて行くんだ。うらぶれて病みてやつれて、故鄕遠く、東海の濱にさすらひ、徒らに甲斐なき悶へに苦しみつゝある自分は、此の風物に對して涙を催さずには居られなかつた。

「アノ松林にネ、此所の火葬場があるんだぜ」

F兄は此く云つて、淋しく笑ひながら、尙烟を見詰めて居た。

○少女

途上、琴を脊に尺八を右手に編笠を左手にして黑の紋付き着たる四十路計りの色白き男子、此類に見るけば〳〵しきとは異なり其夫と同じ樣なるいでたちせる同じ程なる年頃の色黑き女子、貳人が中に少さき刀を腰にたばさみ、骨太の扇子握らせたる、いたいけの少女立たせて、同じ生業の友にやあらん、編笠を後にはねて、手に只一管の尺八を携へたる、廿四か五か、眉濃き靑年と相對して互に時を交はしつゝあるを見たりうらぶれ果てゝ爲す由もなく家を棄てゝさまよい出でし悲しの身か、天下に放浪して一管の笛、十三の絃に其生を托さんの風流の友か、眉濃き人よ、夫婦の人よ、强くして幸あれ。

さるにても彼のいたいけの稚兒よ、我は今汝の前途を思ふに耐へざる也、貧しきと弱きとはしいたげて快しとする情け薄き世に汝はそも何故に貧しき人を父母とはしたる、何故に弱き女性とは生れ來つるぞ。

我は遂に彼が身の健康を祈るに惑ひありき

○落花

淸見寺の境内は午前の風雨に吹き散らされた、紅白の梅花で滿庭狼藉たる有樣である。梢の花は殆んど盡きて居るが、尙ほのかなる其の淸き香を慕つて居る、自分は土に委して泥に染まつた紅梅の一個を取つて試みに其の香を嗅いで見た。

アヽ此の馥郁たる淸香！

雨に打たれ、風に吹かれ、梢から引ちぎられて、モー花とも云へぬ花であるのに。尙其天性の有り丈けを盡して居る、其の精氣を發揮して居る、雨も降れ風も吹け、我は此所に——泥土の上に——喜びて我が一期の本懷をとげんのみと!!

自分は永生と云ふ事を思つた、此花に實を結ばぬ、種を作らぬ、けれども、實と云ひ種と云ふ時間的な結果を離れて、其の生を盡しつゝある所に、時間を絕したる永生のある事を思つた。

北米のプリマドンナ
イームス女史

エンマ・イームスはボストン辯護士の女なり。父は一時上海に來住せしが、イームスは實に其時に生る。されど最後北米合衆國に連れ行かれ、同地にて始めて歌術の稽古に就けり、其立派な天才が上達せし時巴里に至り、一八八九年同都のオペラに於て、ジュリエットとして、初舞臺を勤めたり、一八九一年夏には、デスデモナになりてコベント・ガーデンに出でぬ。次で同年内に紐育に現はれたり。

爾來イームス女史は引續いて合衆國にありて其美音を揮い居れり。彼女の事蹟は既に米國にては知らざる人無き程なり。彼女の演奏の範圍は他の歌妓程に廣からずされど獨逸、佛蘭西、伊太利等のオペラに亘り「ツロウエートア」に於けるエルサやエリサベスよりジユリエツトやレオノラに及び「ドンギオバニ」に於けるドンナアンナの如きクラシクのモザルト風よりパクシニのトスカやマスカニのイリスの如き近世的の役に及んで居る。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人と演藝（二）

無一庵主人

△ロスヰターの功績

ガンデルシャイムの優しき尼の名は、今日では多く知られて居ない。けれど獨逸及び佛蘭西ドラマ研究者や、少數古物學者や大學教授等は、此古代と近世との間に闊歩せる偉人の功績を稱揚するにベストを盡した。ロスヰター尼の著作は一五〇一年に出版されたが、其實は當時の獨逸、伊太利の人道主義中に一波動を惹起した。されば、彼女のドラマが十六世紀の戯曲家中に既に知られて居て、彼等の技術を刺戟したと言ふとは、之を想像するとが出來やう。されば又、ロスヰターが後々ドラマに及ぼした感化は、今の吾人が想像するよりも遙かに多大であつたろうと思はれる。歴史―事ろドラマ的藝術及び文學―の上に現はれし婦人中、未だ其名をロスヰターよりも高所に列ねた者は無い。近世ドラマの創始が婦人であつたと言ふとは、婦人に取らすに光榮ある月桂冠を以てせる者である。殊に有史以來最初の婦人戯曲家が最高最大なる理想の鼓吹により其著作をものし且つ其志望がドラマの道義的基礎を高上するにあつたと言ふ事は、吾等の誇りとするに足る所である。

△女優

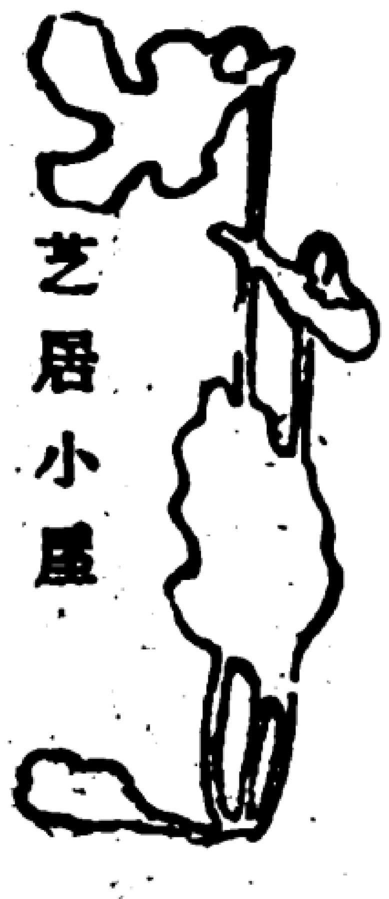
此近世最初の戯曲の著作者と同じく他に一の重要なる事項がある。即ち其著作の演劇是である此事に就ては久しく議論が解決せなかつたが、今日では、獨佛の學者の論斷によりて、ロスヰターの芝居は悉くガンダルシャイムの尼寺で、若き尼がヒルダシャイムの僧正の前や、貴宮高官や貴族等の前で踊つたものであると言ふことに決定された今日の教會と藝術との間に於ける極端なる反感は素より兩方の人々の偏狹なる心から生起したものではあるが、併し此反感ある今日よりして、此の如き近世の芝居の起源を見る時は如何にも奇異に感ぜられて殆ど事實とは思はれぬ程である。併し、吾人若し古代及び近世ドラマの全歴史を知悉せんか是れ實だ自然の事實である。且つロスヰター以後久しきの間も、ドラマは精神の表顯する所ろが、單に所謂祭禮神秘劇に限られ、宗教や、芝居に表はさる、所作が、ロスヰターの芝居ところで無く、非常に不合理な奇異な事に限られて居た事を知るならば近世劇曲の起源が寺院内にありたりとて別に不思議でもあるまい。

さて此に於て置くべき唯一事がある。此の如き芝居に於ても、通例は婦人が這入つて居なかつたを最もである宗教劇に婦人の加入して居た實例が唯一つある。十六世紀の初に、メッツの町に於て、三人の婦人があつた。三メリーと呼ばれ、神の情を代表する者とせられた。併し尼寺に於ては、劇私開の慣例がロスヰター時代より中世期の間斷絶して行はれた様である。此等の芝居は屢々僧正から禁止されたが、十六世紀に繼續した事は事實で、西班牙尼寺中に於ては其が既に一個の習慣とさへなつて居た。

△西班牙の女優

十六世紀の半期中に、即ちシャーヘ五世の治代に、西班牙に於ては婦人が一の職業として劇壇に現はる、に至つた。併しながら、其婦人の出現はタイリップ二世の子シャル、が特に勅令を以て之を禁止した爲め、一般公衆の歓迎を受くる迄に至らなかつた様である。されど間も無く此法令は實行せられなくなつて、女優排斥の事は無くなつた。オースチン、ド、ロヂャといふ西班牙の文學士の言ふには、彼のコープ。ドウエガの時代には、非常に多くの旅役者の劇隊が全國に存したとのことである、彼は此等の劇隊を六種に區分して列記して居るが、下等な劇隊にては女の役も男が勤め中等のものになると女か子供が之を勤め、ファランデュラやコムパニア等の高等の所になると女の役は總て女が勤めたとのことである。サーヴンツは其著『ドン。キホーテ』中に或る俳優劇隊が一婦人を有し、其婦人は作者の細君で、皇后の役を演じた事を書いて居る。

西班牙に於ける芝居の始めの歴史には何か一の興味ある事件がある。其は一五八六年に男子と女子とに對して別々に芝居を見せやうといふ計劃である。して女子の爲に選ばれた時間は正午后にて『マンチネー』と演奏ん定例とした、而して一人に一枚當入場券が七百六十枚も交付されたといふ事實によると、當時マドリッドの婦人達は非常に其『マンチネー』を好んで居たと見える。乍併、此の制度は如何なる理由でか、政府の禁止する所となり、其會は償却された。而して婦人の爲にする『マンチネー』專門興行の慣例は今日まで再び起らない。



芝居小屋

晩霞

鎮守の祭りの夜であつた。私は家の子供等にせがまれ、案内、保護を兼ねて、おの觀ひ興行の芝居を見に行つた、私共の行つた時は最う幕が開かつたので、田舎村の例とて、諸物ぼしがつて、村の人や祭りの客やで、掛ッ張り小屋は立錐の隙なきまでに、一杯に詰め込まつてゐた。子供等は嬉しく會釋なく見物人の中へ割り込んで行つて席を取つたが、私は井底大人氣ない事をするのも恐やで、後の方に唯だ立つて見てゐた。幕は開いてゐて、外題は道中膝栗毛だつた。所作は見えたが騒々しくつて、白詞は殆んど聞こえはしなかつた。

と『高井さん』って女の聲して、そつと袖を牽く者がある。振り返つて見ると峯子孃である。私の親しい女なんだ、他に二人の婦人を連れてゐる。二人共多少見知り越しの女である。峯子が『貴方見えますか』といふ、ハア、名にし負ふ高井ですから、などと答へて笑ふと、『本當に背の高い方は羨ましいのね』といつて嬉しく笑つた。他の二人の女も笑つた。私は婦人達を前に出して、矢張り後に突つ立つて見てた。

其の中に幕になる。代はつて入り込むのがある。立つて手足を伸ばすのがある。據はつて席を占めるのがある。話す、笑ふ、叫ぶ、欠伸の聲がする、煙草の煙りが渦を卷いて場内が騒々しく動搖した。婦人達の一人が『わちらに掛けれそうな所がありますよ。前刻から立ち見よりはい、でせうから行つて見ませう』といふ『高井さんも入らつしやいな』と峯子がいふ。跟いて行つて見た。或る桟敷は取れた。が若々しい事一ト通りぢやない。少しも動きが取れぬ。

幕が明く、『淑川の土橋』とか何んだかいふ狂言だそので、婦人達の一人が教へて呉れた。私は平素病弱なために、芝居は余り見たてとがない。が性質は好きな方なのだ。然し一心になつて見とれてゐべく、私は餘りに足に痛みを覺えて來た。右も左も前も後もギッシリ入が詰まつてゐるので、伸びも縮みも出來ないのだ。峯子は殆んど私の膝に凭りかかつてるといふ有りさまなんだ。

私は悶々として足と苦痛を忍んでゐた。堪え兼ねてゐる中にまた幕。また芝居が繰り返される。藝術に乘じて、私は思ふ存分緩くりと大きな胡座をかいた。峯子は殆んど全く私に抱かれて了つた。私は體に餘裕の出來ると共に、峯子の體の温みの自分の肌に通じて來るのを覺えた。髪の匂ひのふんと鼻を打つのを覺えた。私は云ひ知れぬ或る情をそゝられるやうな心地がし出した。この時宗教の權威で私を威服する力が無かつた。私は神様も佛様もあるものかと思つた

私が陶然として夢のやうになつてる時、今まで後の方に立つて饒舌つてゐた書生連が、ゾッと入り込んで來た。狭苦しいのに五月蠅い奴等だな。と私は顰め顔をして睨めてゐたが、書生連は那麼事には一切頓着なしだ。はまだ善いが、彼れ等は峯子等の婦人連に向かつて、押れ〳〵しく冗談を掛けるのだ

婦人連もまた隔てなき相に應對してる。峯子までが嬉々として挨拶してる。私は何んだか掌中の玉を奪はれたやうな氣がして、淋しい、悲しい思ひに沈んで了つた。そして何んの氣なしに壇から舞臺を眺めて見た。恐ろしく嫌な場面だ。その世の中では最う駄目！―と心に悶いた。鳴呼蛇の道は蛇が知るのだ。若い男女同志の間には、自ら暗合默契があるのだ、私のやうな中年のものは、最う美しい國に顧みられる時はないのだ。と心の淋しみに泣き沈んだ。

私は敗北、御辭といつたやうな不愉快な情に堪えないで、『さて歸らうかな』と覺悟して立つた。峯子が『高井さん、待つてくださいな。私共も歸りますから』といつて峯子も婦人達と立ち上がつた。其れで子供と連れ立つて歸途に就いた。私は大勝利と心に叫んだ。が其心の底には、自ら敗者の感と寂寞とが小さな塊を擬して居る

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

伊三坊

木下尚江

（一）

出て見る毎に、小いさな新しい家が殖えて居る、田を埋めたり池を埋めたりして、後から後から家を建てる準備に忙がしい、實に無雜作なものだ、炭俵へ掃溜の芥を詰めたのを抛り込んだ上に、ほんのおマヂナイ程に土を置いて、それで直ぐに家を建てるので、日暮里も瞬く間に兎に角立派な貧乏町になつて仕舞ふだらう。

野路の細い流れには、二月の寒い風に尻を向けて、母と子と眞赤な手足して、ガシ〱と青菜の束を洗つて居る、是れが明日都會の人の膳に上るのだ。

母子は折々顔を上げて予の方を睨むように見る、定めて腹の中では「此懶け野郎」と思つて居るのであろう、若かい男が小便桶を擔いで來た、埋め殺しの池から水を汲んで、ザア〱と混せて居る、然かし池も畑も日に〱家になり替つて、百姓の生活が見えるように壓迫せられる、人は之を都市の膨脹だと慶賀する、然れども都市の膨脹とは必竟予等同然の懶け野郎、遊食の民が押し込んで、農民の田地を横領して仕舞ふことだ。

千住の發電所と製絨所との大烟突からは眞黒な烟がモク〱と競い立つて、其れが強い風の爲めに淺草の空指して幕のように擴がつて行く、製絨所のと少こし離れて同じように烟を噴いて居るのが、火葬場の烟突だ。

様々の空想に驅られながら三河島への狭い街道へ出ると、三郎君の學校からの歸りにヘタと出逢つた、顔さへ見れば處嫌はずに生死の問題を持ち出すのが三郎君の癖だ、特に此頃は、三郎君の近所に、腸膜炎の小兒があつて、何分にも其れが氣懸りだと言ふ「ちや、僕も見舞いに行かう」と、打ち連れて、鐵道の踏切を越して三河島へと急いだ。

（二）

とある長屋の裏口へと、三郎君は予を案内した、古障子の直ぐ中から、小兒の大聲に何か叫ぶのが物凄く響く。

「如何ですね。」

と三郎君は柔しく聲を掛けながら、狭い椽側へ腰掛けて靴の紐を解く。

「あら、先生」と女の聲がした、多分病人の母であろう、ゴトリと障子が明いて、デップりと肥つた年増の女の顔が出た「昨日よりか少こし好いように思はれますが」

「然うですか」と三郎君は上がる、予も随つて入つた。

六疊あるなしの一室、古いながら箪笥が一臺、壁側に飾つてある、お佛壇がある、長火鉢がある、飯桶がある、火鉢の向ふには近所のおカミさんが、林檎のような好い色の赤い顔して、坐つて居る、椽の障子の直ぐ下に寝所があつて 低い屋根裏から、鼠色になつた白木綿の細く裂いて継いだのが下がつて居る、此の細い木綿紐の先に小いさな氷嚢がくゝられて、氷嚢の下に青い顔の小兒が目を閉ぢて寝て居るのだ。

父は千住の製絨所の日雇勞働者なので、朝早く行つて夜でなければ歸つて來ない。

母は病氣の様子を三郎君に物語る、フム〱と可愛い目を俯けて三郎君は聴いて居る、母親の話振りにて、予は其の一縷の望を我が兒の生命に繋けて居るのを見て、何とも言えない悲哀を覺えた。

「お母ちやん〱」

と魂消えるような聲立てゝ呼ぶ。

「お母ちやんは此處に居ますよ、お母ちやんは此處に居ますよ」と、母は枕に顔すり寄せて言ふ。

「お母ちやん、何處へも行つちや厭だよう」

「何處へも行きやしないよ、何處へも行きやしないよ、伊三ちやんを措いて何處へも行きやしないよ」

小兒は又た静かになる。

「是れで解つて居るのでせうか」と母はホッと溜息ついて顔を向けた。

「さあ、如何いふもんでせうね」と、三郎君は首を傾ける。

「解りますとも」と予は答えた「貴女の聲は聞えないにしても、貴女の心は確に通じて居ますよ」

「然でせうかねえ」と母は覺束なげにヂッと我が兒の寝顔を見やる。

「然うですとも、だから一生懸命に看病してあげなさい、良い醫者に診せられないからなぞと、そんな事に餘まり氣を採みなさるな、醫者の力と言ふものは極々些細のものです、人の生命は元々、人の造つたものじや無いでせう、生死は天に任かせて、只だ心のありたけを盡くして看護しておあげなさい、貴女の体をクッつけて離れないようにして居て、おあげなさい、何も言はないでも、貴女の心は能く病人に通じますよ」

母は我兒の病み始めからのことを徐ろに物語る。

「お母ちやん〱」

と小兒は又た切りに呼び立てる。

「どうです、口が渇きやしないでせうか」と三郎君の注意で茶碗に冷水を汲んで來たそして房揚子に浸して我兒の色褪せた唇へと持つて行つた、如何ばかり深く渇いて居たのであろう、小兒は目を閉ぢたまゝに口を開いて、噛みつくように揚子を吸ふ、揚子を浸たして居る間も待ち遠ふに、小兒は切りに口を開いて、上がらぬ枕をさへ上げるように水を求める、見て居る心もイラ〱する。母親は揚子を棄てゝ、我が唇を茶碗につけた、そして其の待ち焦れて居る可愛い我が兒の顔へ折り重なつて、含んだ水を口移しにした、二たび三たび口移しにした、小さき茶碗の水は盡きた、小兒はまだ口を開いて夢中に求める、母はいきなり蒲團の中へ身を入れて、ヒシと我兒を抱きしめた。

近詠

板倉久子

○
影山梅子刀自のみまかり給ひけるを悼みて
世のちりをいとふて散るか梅の花

○
春の夕の景色を見侍りて
花もやゝほころびそめて青柳のいとももみどりにかすむ夕月

○
花のさかりに風のいたく吹きすさみければ
深山邊に咲くてこそ花はゆかしけれ都のちりにうつもれもせで

○
汽車にて田子の浦を見侍りて
波よする田子の浦曲の夕月夜おぼろにかすむ海士のつり舟

○
朝またき清水のやどりよりながめ侍りて
不二かねや箱根路かけてほの〱と霞にわくる三保の松はら

春郊外

旭山人

○ 滿山は血汐滴たる花躑躅、淀の一叢むらさきに燃ゆ

○ 春まさに去らんとすらん紅ひの悶えの色に山躑躅咲く

○ つゝぢ亦た燃ゆる紅いの色に咲きぬ昨日散りにし櫻おくりて

○ 若綠もゆる野に出で土筆つむ乙女が指は色づきにけり

○ 優しくも花の菫は俯しぬ土筆は天を仰ぎ立つ時

○ 土筆つむ乙女しらすや野菫が其傍に頭垂るゝ身を

○ 遠山は霞にかくれ鷄の聲のどかなり春のあけぼの

○ 日いでゝ銀鱗の波かゞやきぬ風やわらかき利根の春曙

○ 浮ばんか筏に乗りて浮ばんか見よ楫とれる丈夫が雄姿

○ 南椽の花の蔭さす窓の内に梭の音ゆるう乙女機織る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

婦人の價値變動

石卷良夫

△婦人の經濟的價値

婦人の社會上に於ける地位は常ねに其經濟的價値に依つて定まるものである。經濟上の價値に變動がなければ其地位は決して動きはせぬ。此意味に於て人間の歷史は價値變動の歷史である、過去に於ける變化は勿論の事、今日の斯々の變化と雖とも、其中心には經濟的價値の變動があつて、そして夫等の變化を有効に規程しつゝあるのだ。婦人の經濟的價値と云ふてとは今日から見れば別に深い意味のあるやうにも思はれないが、長い歷史的過程の上から見下ろすと人間の社會生活の全面に向つて非常に重要な意味のあることが判明する。少くとも婦人夫れ自身の地位に大なる影響を及ぼしてゐる丈け重要なる事が容易に了解される。

△婦人は農業を發明した

先づズツト古い處で婦人は農業を發明した。婦人が農業を發明して權利を確立した。婦人が農業を發明したと云ふと語弊があるかも知れぬが、蒙昧未開の時代に於て男子は專ら動物性の食物を探求し、女子は主として植物性の食物を探求してゐた、現に濠洲の或る土人の間にては此原始的分業が行はれてゐる、婦人が植物性の食物を探求するには小さな木の棒を携へて野山へ出掛け、森林の間を跋渉する、そして其獲る處のものは多く木の實、草根木皮の類であつた。夫れが漸次進んで自然の供するものを其儘に採取するの外、自然を栽培して其收穫の增加を圖ること、なり食物獲得の方法に多少の秩序が出來ると云ふのは非常な一大進步であつて、夫れまでには恐らく數百年を要したことゝ推察される。其進步の担任者は現在男子の抑壓を蒙むりつゝある婦人であつて、田地の開拓其他の荒仕事は凡べて男子に遣らせるが、主要な稲播き、收穫などは皆な婦人の手を煩はしたのである。我國でも崇神天皇の朝「弭の調」「手末の調」の制度が行はれてゐたことから考へて見るも當然婦人の農耕と云ふことが古くゝ存してゐたらしく想像される。殊に「日本書紀」などを見ると、天照太神以二天狹田長田一。爲二御田一。と云ふ樣な文句がある。明らかに婦人の農耕が行はれてゐたことが判かる。然らば此くの如き婦人の農耕は婦人に如何なる社會上の地位を與へたか、婦人は低度農業時代に於て主要なる生產者であつた。其結果土地も家屋も凡べて婦人の所有に歸し、男子は婦人に食はせて貰つて單に三等の婦人財產を整理する位ひに過ぎなかつたのである、されば婦人の地位は無論男子の地位に優さつてゐる。宣戰講和、奴隸の使役、子女の監督皆婦人の職分であるとして、婦人の首長と云ふやうなものも決して少くはなかつた。今日でも馬來人の婦人は男子以上の權力を有し、血統は總べて母系に依りて定められ、妻に罪科あれば夫は之れに連り、妻姦通すれば夫は其財產を留保して妻を放逐し、相手方を誅戮することが出來るけれども、若し夫が他の女と姦通でもしたなら夫れこそ大騷ぎになる、實際せなくとも疑ひがあれば近所の女達が悉く集つて來て其男を取り捲き面白半分にイヂメ殺して仕舞ひ、そして其財產は其妻の有となる、女權の擴張も茲まで行けば澤山である。

△田地を失へる婦人

然るに歷史上、婦人の優勢は實に朝露の如きものであつた。間もなく男子は其財產を婦人の手から奪ひ取つた、そして腕力づくで遂ひに婦人を自分の權力の許に屈服させたのである。田地を失へる婦人は哀れなものだ。

婦人が田地を失ふと云ふことは夫れだけ男子の經濟的價値が增して來たからである。遊牧生活をして戰爭や掠奪に耽けるやうになつた男子は最早人の支配を受ける必要がない、先づ家族に自分の所有權を認めた、次いで掠奪せる土地も自分のものにした、こうなると婦人の生活の維持と云ふことは餘程腕力を要するからして婦人も巳むを得ず男子に依頼し、其地位を轉倒すること、なつたのであるが、要するに其變化は即ち經濟的價値變動の結果に外ならぬのである。歷史上明らかに世間の注意を惹いてゐるのはチユートン民族である、チユートン民族が中央亞細亞から漸次遂ひ歐洲へ這つて來た時の其民族は旣に母權制より父權制に移つてゐた。又日本へ移住して來た時の大和民族と同樣の變轉期にあつたものらしい。何んとなれば當時の大和民族には猶多妻制の遺風と目すべきものが殘り、大體はパトリアカルの家族制度を存してゐたのである。家族制度は日本建國の基本であると云ふ人があるが、大和民族が起つた時から家族制度が存してゐたのではない、日本へ移住するに就てこう云ふパトリアーカル、家長的の制度が出來たのである、チユートン民族が移動するに當つて血族團體たるゲシユレヒトを編制したのも之れと同じ理屈であるらしい。此くて此制度は長い長い間勢力を得た、時としては奴隸、婢僕をもメンバーに加へ又時としては家長に妻子に對する生殺與奪の權が生じ、時としては長子相續の習慣を拵へ色々な變化を經て今日に至つた。此間に於ける婦人の地位と云ふものは實に悲慘を極めて同情に堪へぬ。然らば何故其樣に婦人の地位は低くなつたのかと云ふに夫れは經濟的價値が全く零に歸したからである。

△婦人職業問題

凡そ婦人が男子から奴隸視さるゝと云ふことは果して天理に適つたものであるかと云ふに夫れは甚だ疑問に屬する。彼の形式的の男女同權論は別として、個人性の伸張が現代文化生活に於ける重要な要件であるとするならば、無論婦人の個性を尊重せなければならぬ。道理、自我の實現だとか人格の發展だとか云ふことは決して男子ばかりに必要なことゝは考へられぬのである。然るに今や婦人の個性を伸張せしむ可き機會が來た、夫れは婦人の職業問題である。婦人の職業は生活難から來たので、現實緊急の必要と云ふことが其眼目になつて居る、決して哲學上の空論から打算されたものでないことは明らかである。然し婦人の職業は意外にも婦人の個性を伸張す可き機會を與へた、夫れは財產權の恢復に依つて現はれた出來事である。婦人が生活上の必要に迫られて職業に從事すれば其處に當然婦人の所有となる可き財產が出來る、其財產に關しては今日まで色々に考へられたが結局獨逸の新民法では妻の獨立財產を認むる事となつた。婦人に財產が出來れば更らに人格上の個性の要求が起る、夫に對して全く獨立の地位、不可侵の人格を保たんことを願ふやうになる。さもなければ其財產權は確實に維持し難い。我國でも財產上は既でに全く婦人の個性を認めてゐるけれども、祖先崇拜とか、國史尊重と云ふ尚古主義の爲めに沿革上の觀念があつて家長權は尙ほ民法上に其痕跡を存してゐるのである。然か、今に及んで純粹の家族制度を恢復し家なるものを國家の構成分子として之れに人格を與へんとするは、既でに確立せる社會の基礎を轉覆せんとするので、到底現實の望みなき事たるは云ふまでもない。而して今や夫婦關係が一の契約關係であると云ふことはヂルスに依りて論證せられて居るのである。夫婦契約論は或る人際な議論に見えるかも知れぬが、妻に人格の自由を認めた以上は離婚の自由を與へるに何の不都合もない。日本の家庭なぞでは殊に此必要がある、夫の放埓な爲めに一生を泣いて暮らすと云ふ樣な婦人に取つては、離婚の自由は夫に對する頗強の武器である。愛なき結婚は結婚其物の目的に適はないからして夫婦關係を契約關係とするのは亦愛なき結婚を防ぐにも少からぬ力がある。

△企業と家族との價値關係

最後に企業と家族との價値關係に就て一言して置く必要がある、元來企業と云ふ事は其始め家族の仕務に屬してゐた、夫れが分岐して一の單位を構成するに至つたのは家族の倫理上の任務を果す上に企業、即ち經濟行爲は邪魔にもなるし、又經濟作好の側から云ふも家族の範圍に限られて居ては十分な欲望を充足することが出來ないので遂に此二は別な價値關係の上に立つ必要を生じたのである。そして企業は專ら男子の担任する所であり家族は主として女子の活動舞臺であつた。然るに婦人解放の結果、婦人も企業に頭を突込むやうになつたので此二つの價値關係は今や非常なる混亂を生じ社會生活の全部を一の家族と爲すが、然らざれば企業と爲すかの二途其一を擇ばなければならぬ必要に到着した。婦人の解放は玆に至つて決して單純なる口頭問題であるとは云へぬ。即ち婦人の價値變動と云ふことが一の前提となつて、今や社會組織に大變動を與へんとする根底の甚だ深い異性の社會問題なるものが惹起せんとしつゝあるのだ。之れを如何に解決す可きかは更らに他日を期して論ずる考へである。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

我が信、我が神、我が道

添田生

僕は神學者でもない、哲學者でもない、聖書學者でもない、科學者でもない唯一個の平凡なる青年信者に過ぎぬのだ。

それ故、僕には學術的方面の堅固なる信仰の基礎を持たないことを前以て告白して置く。勿論僕は今日迄全く無研究だと云ふのではない。幾度か識者著書も繙いて見た。大家の説を叩いて見た、夜半人無き所に、「我とは何者ぞ」「神果して有るか」、人生の眞意義とは何ぞや」と獨り思想に耽つても見た。

而も自ら健設して、自ら破壊し、自ら信じて自ら疑ひ實に僕が過去數年の信仰の生活は、深山に道を失へる旅人のそれの如く否それにも増して迷夢の生活であつた。

僕は年齢未だ立志に到らずして既にクリスチアンのライフを營んで居つた。勿論何等の識見あるではない唯神は有るものだ、キリストと云ふ御方は今から二千年の昔ユダヤの國に生れ、而も其生れ方がマリヤと云ふ處女の胎内に神の聖靈が孕むで生れたのだ。彼は成長して三年の間天國の福音を宣傳し、後世人の罪を負ふて十字架上に死し、三日にして甦り、四十日にして昇天し給ふた。渠は神の獨子で、世の救主である故に渠を信ずる者は皆救はれるのだ。と云ふ此信仰だ。

僕は實に不思議なとがあるものだと思つた。長ずる從ひ僕の胸中には一つの疑惑の雲が湧ふて來た、そんな馬鹿氣た話はないと思つた。然し又考へた、聖書に而う記録して有るではないか、二千年來の正統派の信仰は是である。基督教から復活と聖靈の先天的神性論を否認したならば、死せる教會も同様ではないか、基督教の生命は此處に有るのだ、と而う信じた。然し又疑ふた。

僕は牧師に尋ねた。

牧師の答は是であつた「信仰は未だ見ざる所を眞實とする」にある。神は能はざることなき方である」是一點張りだ。

僕はそれを信じた而うして。爾後は決して疑ふまいと堅く定めだ。爾來數年僕は、只管此信仰の道に歩むで來た、のみならず傳道者の末席に加はつて此信仰を傳道し、鼓吹して來た、されと其間終始僕の胸中には一縷の恐怖と戰慄とがあつた。それは僕の理性の絶叫が如何にしても此信仰と調和されぬことであつた。

僕は幾度か教壇から口角泡を飛ばして熱烈なる説教を試みた、然し説教は僕に取つて一つの苦痛であつた。悲哀であつた。「汝は人を僞る罪人である。自ら確信せぬことを他人に宣傳する奴があるか」と何處よりとも無く辟するのである。

苦悶は日一日と増加して、終に其頂上に達して僕の信仰は全く破壊されて了つた。僕は理性の要求を拒絶することが出來なかつた。

○

勿論、僕は、所詮は、宗教はハートのものだと思ふ。理性常識超越したるキ印の所に宗教の生命がある樣に考へる。僕には如何にしても冷かなる哲學、科學にのみは満足が出來ない。智識の究極に何者かゞ存在して居る樣に思はれる。而うして夫は神だ。

然し同時に僕は又理性常識の要求を拒絶することが出來ない。

丁度昨年のクリスマスの前夜であつた。澄み渡つた空に冴へそうな一輪の月が傳通院の境内の杉の木の間から薄暗い僕の室を照らして居る。僕は考へた。

「イエスの誕生が果して何時であつたかは確定されないが、恐らくは今宵の樣に澄むだ空に星の輝く美はしき夜であつたであらう。天使の讃美に歡ばれたに相違ない。博士らも羊飼らも傍に喜びたであらう併は誘惑と罪惡とに満ち充ちた丸で暴風の樣だ。斯かる時に此に聖の光が、神の子か現はれ給ふたのだ。而うだ夫は確かに神の子だ、聖靈の化身かも知れぬ。」

○

僕が斯く思惜に憧れて居る時、忽ち鐵槌の樣に僕の頭上に落下したものがある。それは是れである。若しイエスが聖靈の化身であつて先天的神の子であるならば吾人凡人は、罪に因つて生れた人類は神の子たることは能はざるものであらうか。ヨシ神の子と呼ぶは呼んでもイエスと同格たることが不可能なのであらうか。

此れは餘りに突飛な考である。無常識なる考へである。然し僕は眞實而う思つた。

刹那僕が多年苦悶しつゝ來た問題に解決された。處女の懐妊など云ふは決して有り樣筈がない。

彼は正しくヨセフの子であつた。夫れは僕の理性の叫びであつた。或人は曰ふのであらう、噫汝神を瀆す者よ汝は聖書の無謬を信ぜざるか、神の全能力と奇跡とを信ぜざるか、と

▲僕は其人に答ふる、僕は勿論聖書の無謬を信ずる、然し諸君よ、眞に聖書を解する者は聖書記者夫れ自身より外にない。而して吾人毎日聖書を研究する者は須らく記者の心を以て記者の時代に於て研究せねばならぬ。弟子達の眼に映じたる五人は眞に愛の人、正義の人、一點の汚れもなき神の化身であつた。理想の亨であつた。彼等は而か思つた。是の尊き人が異逆に罪ある人、税吏と同樣の生理作用に因つて生れたのではあるまい。恐らくは聖靈の孕みに相違ないと信じた。殊に科學的智識に乏しく、且つ多年救主の降誕に憧がれて居つた。ユダヤ民族の信仰よりして斯く紙上に記載されたのは決して不思議ではない當然のことである。

○

僕は議論する柄でや無いから多くは曰はぬ。唯渠が一細胞であつた時から、十ケ月の胎内の生活から、無邪氣に母の懐に抱かれて微笑した時から、渠が生涯の一切の秘密を認知する。渠の母マリアがなほ渠を信せずして狂人と呼ばはりしを見ても明かである。故に是れは聖書の誤謬ではない。唯時節に書いたまでのとで、歴史的には解することが出來ない。

春雨小景

女學生

○ 旦毎に障子にうつる梅が枝の、けふはうらゝかなるべき朝日の光なく、たゞしづかに春雨のふる、窓推して外を眺むれどそれとも見えず、折立ち出でゝ空を見上れば銀糸の如き春雨の糸の音なく、土にしみゆく默何にかたとへまし、實に春雨てそ詩趣深きものなれ。

○ 若草もゆる春の野を音なく注ぐ春雨のやさしけれど羽重からでか空には、雲雀の聲閑かに、蝶さへ雨を愛ずるにや菜の花の間に其可憐なる姿をひらくさせて遊べる田園の春のけしきの都けきよ。

○ 春深うなるまゝに岸の柳のみどりに煙る姿なよやかに、そよふく春風にもたえてゆら〳〵と垂たる枝の揺る雨降る日は、白ら青味を帯びて何となく春の女神のさまよひまへると思はるゝばかり梅はすでに綻びそめて櫻なほ咲きまず、笑まねども此柳を見れば人は心も春めくならむ。

新刊紹介

△まこと(第一號) 眞宗大谷派教授佐田賢見氏を初め佐藤社同人諸氏の經營にかかるもの、發刊の辭に曰く「雑誌のことを發行するのは、全く其の人生の大事を語り合ふ適切な道であるのであります。それでこの雑誌は如何なる人も味へる樣にと易く書き直ちに教壇の奥底が分るやうに宗教の趣味だけ選び取つて紀すのであります」と、理論に落ちずして深い眞理なき、吾心の深い宗教雑誌を平易に味はす、家庭や婦人の好伴侶として之を江湖に推奨す(毎月一回一部三錢府下巣鴨庚申塚眞宗社)

△大阪佛教(二の四)「佛教青年會の意見を綜合して」立つ我「大阪佛教」の異彩を放つと」宣言して出でたる此雑誌は號を追ふに從て其体裁内容共に漸く整頓し來れるが如し(毎月一回一部十錢大阪府東成郡天王寺村大阪佛教社發行)

△歐工の友(第七號) 活版歐文植字工諸君の團体たる歐友會の機關雑誌なり、伊東、石宮、峰岸、高松其他の諸君一筆を揮ふ(京橋區新湊町一の四歐友會)

○編輯局より

(石川生)

△今度の號は紙面に現はれ居る如く、讀者諸君より多くの寄書を賜はりし爲め、材料甚だ富豊なるを得て編輯者は深く喜びつゝ感謝致して居ります、何卒毎號續々御寄稿下さる樣願上ます。

△第二面女學生君の「女學生の告白」は、現代青年女子の心情を最も痛切に吐露したものと認じます。第三面大賀君の「理想的婦人觀」は現に東京府の實際地の事實なるだけ何人も深き印象を受けることと察します。此の如き事實は人を説服するに千萬言の議論よりも効能があるでしやう、第八面石川君の「婦人の價値觀」は眞面目なる研究の結果なれば讀者諸くは其心して御熟讀せられたし。扨九面、添田君の信仰告白は現代の基督教徒の胸中を遠慮なく披瀝したものとして茲に御紹介致します。添田君は先頃まで救世軍の士官でありました。

△其他定連の寄書家諸君の事は今更贅言を挿む必要もないでしよう唯だ其多大なる助力を此貧弱なる雑誌に與へて下さる御高意に對し、改めて茲に感謝の意を表します。

△石巻君は久しき以前よりの未見の友なれど今まで寛大なる寄稿に接して、今更らの樣に御身の上が思ひ出されるが不幸にして御住居が詳かで無い爲め通信することが出來ません。

△前號「哲學を捨てよ」てふ論文に對しては諸方より反對の聲が聞えた。内山愚童君の「哲學の(?)」は外は悉く反對でかの子君の哲學に就ては其最たるものですが「石川大先生」には少々迎ひいたしましたかの子君は御婦人ならも中々人が悪い、「先生と言はれる程の馬鹿でなし」といふとがありますが、僕は「大先生」といはれる程の大馬鹿となりました。餘り大言をした報いでおらうと諦めて居ます。併し人間が果して馬か鹿かは古來未だ何人も定めぬ所であります。次號には此反對論を一束げにして、反々對々論をものし、果して馬か鹿かを決したいと思ひます。

△此頃は内務攻撃の好問題といふ事がドウかは知りませぬが無裁判といふ、編輯の坂田女史に對する反對論が出て居ります。此反對論に對しては男子の讀者は多く賛成の御樣子です、坂田姉も亦之に對して一矢を報いやうとて準備も既に編輯者の机上に來て居りますが、紀事輻湊の爲め次號に譲りました。

△社會黨中の名物の一たりし内山和尚は内外の迫害によりて非常の放逐たる林泉寺を追はれるに至りました。吾人の運命は遂に何處まで墜落し行くべきか、嘸ど憫然に出來ない問題であります。

△木下君の「(?)」の一坊、添田君の「我が信、我が神、我が道」は次號にて終り、次號には安部磯雄氏よりも寄稿して下さることになつて居ります。

△本紙設計事件の方は婦人會の贊金事件の方は婦人會調查の結果により、已むを得ずと會して納金期を延ばして居ます五月七日が大審院の公判開廷日です。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

小説 戀か魔か（前號「發」の續稿）

帆雨生

戀か。魔か。吾が胸は轟ろく。風無きに萬丈の塵煙が立つ、雲無きに天空は一時に暗い。可愛いのか、怖ろしいのか、可愛いのが、怖ろしいのか戀が即ち魔か。

唯だ一筋の糸を斷てば、空に懸かれる美しき輪廓も忽ちに姿を亂して飛散し去る。唯だ一筋の線を斷てば、一家を照せる燦たる灯燈も忽ちに其光明を呑みて暗黒を吐き來る。神と魔と唯だ此一筋を隔つるのみ。けれど今の花岡春雄は、風無きの紅塵に襲はれて居る。雲無きの暗黒に惱んで居る。斷つべきの一線だと見とめられぬ。一糸だも斷たれたとは見えぬ。迷か、惑か、夢か、幻か、波打つ吾が胸に泌み透るは、菊代が床しい香である、菊代の手は吾が肌に接して既に暖まつた。

冷かな土の下からは死んだ靜江が呼んで居る。眼を閉ちた吾が頬に冷たい雫が落ちた。菊代の涙である。菊代の手は吾が懐を出た。机の下にあつたハンカチーフは取られて吾が頬の雫を拭ふた。僕は眼を見開いた。片手を僕の胸に置いた菊代の視線は机の下に向つて居る。軈て他の片手が机の下に延びた。延びた手が縮んで菊代の眼の下に一葉の寫眞が運ばれた。死んだ靜江の寫眞である。今までハンカチーフの下に隱れてあつたのだ。

僕からは寫眞の裏が見えるばかり。「明治卅五年七月六日、君が學校卒業の當日、嬉しき紀念にとて、寫し參らす、靜江」と書いてある。其傍に「明治卅九年一月十五日、夜一夜悶へし朝、吾が腕を枕にして安けく眠る淸見靜江は永へに吾が妻なり、春雄」と添へてある。無言で見て居た菊代は更に其裏を引反へして見た。讀み去る内に其顏には朱を注がれて來た。顏の筋肉は動いて「笑み」の形を現はした。けれど決して嬉しき笑みでは無い。輕蔑の笑みか、面白の笑みか。絶望の笑みか。嫉妬の笑みか。同情の笑みか。いづれにしても赤裸々の笑みでは無い。何物をか其中に隱さうとする笑みである。

嫉妬ならば、ナゼ其寫眞を寸斷して棄てぬか。輕蔑ならば、ナゼ明さまに罵らぬか、絶望ならば、ナゼ號泣して訴へぬか、面白いならば、ナゼ口を開いて笑はぬか。同情ならば、ナゼ其深い心情を披瀝せぬか。わはれ一たび戀に破れた菊代は、此一刹那に會しては、唯だ苦しき笑に蔽はれたる赤面の笑み以外には、亦不可能であつた。

「是れ程うつくしい仲で入らしつたのにねえ……」

僅かに口は開かれたが、咽に塵でも溜つた様に、平生に似もやらず、聲は曇り、調子は澁る。そして此一言で又パタリと止む。

菊代はマダ寫眞を離さない。けれど之を見て居ると言ふ譯では無い。菊代が唯た今まで呼吸して居た甘い空氣は、小さき寫眞一枚に掃はられて頓かに苦味を添えて來た唯だ一葉の寫眞の爲に彼女の天地は變へられたのである。甘きが眞實か、苦きが虚偽か。菊代は十重廿重と煩惱の雲に閉ち込められて居る。此雲は彌天に生じた雲である。

「世の中は詰らないものねえ」

「考えれば、實に下らないです」

「貴方も眞にお氣の毒な方ですはねえ」

「え、……」

「靜江さんと言しやつたの？」

「え、……」

「氣高い美しい方ね！」

「ドコやら貴女に似て居りましやう？」

「私なんぞドウして貴方……」

「私、初めて貴女に會つた時から、そう思つて居ました。」

「僞ばつかり……」

「貴女が仰有らぬ時なぞは、私ドノ位氣に懸りますか！……」

「お上手ね、ホントに……」

雲は少しく晴れて來た。寫眞が持つて來た苦い空氣は和らいで、話の間に再び湧いた甘味が呼吸されて來た。

「イ、え、滅多な事言ふものですか」

「ホントにお互に不幸な身の上なんですわねえ」

「え、……」

話は又た漸々密を添へて來る。僕は新たに勇氣を起して襖を排ねた。菊代は其上に掛けてあつた衣物を取つて、

「此冷たいまゝでお召しになるの？」

「え、……」

「お可愛そうね」

僕は枕を外にして、上の半身を起した。單衣の寢卷を脱いだ時に菊代は後に廻はつて着物を僕の肩に掛けた。

「是れは有り難う」

「イヤな……、態と堅苦しく言やるのよ」

僕は立ち上つて、帶しめて、東の方の窓を明けた。太陽は既に高く、麗かな空に快かい光を放つて居る。堀の楊枝を取つて口に銜へて振り反へれば、菊代は掛蒲團の襟に手を懸けて、何か少し躊躇の態。

「ヤッ、ドウして左樣な……、失禮な……ドウぞ棄置いて下さい」

「イ、え、宜しいのよ！」

一番上の掛蒲團を疊んで、次の夜衣に手をかけて、再び躊躇の態で、

「花岡さん」

「何ですか」

「貴方御飯わがりますの？」

「へ、、何を言しやる」

「今？　直ぐ？」

「朝飯はモウ遲い位です」

「階下で？」

「何時も階下です」

「そう？　お婆さん二階に來ますか？」

「用があれば、何時でも……」

「少し來ないで呉れゝは宜いな」

「大丈夫です、私の飯の間は――、何んですか」

「え、!?……」

「何んですか」

「私、此床に寢て見たいの」

「そんな穢ない夜具に……」

「宜しいのよ」

嬉しそうな笑を漏してコロリと横になつた。小夜衣を取つて、胸の半まで掛けた。其夜具の中から顏を出して、

「御飯の間、此床を借して下さいね」

「何時までゞ宜しいです」

「眞實に？……」

「眞實ですとも……」

僕は言いながら階子段を降りた。井戸側で面を洗つた、お婆さんと共に朝飯を終へた膳に向つてから、始めて、菊代にもと思ひ出したが、折角アゝして横になつたものを呼ぶのも惜しい樣な氣がするし、其れに多分濟まして來たろうと思つたので二人で喰べた。

僕は梯子段を靜と登つた。菊代は涙の流れた眼を閉ぢて居る。左の頬を傳つて涙の雫は滴りて、既に枕には濕いの痕を染めて居る。此夜衣、此枕、是れ幾度か吾が戀の涙に沾ふた紀念の寶である。あゝ終夜此枕にシガミ付いて泣き明かしたと幾度であつたか。終夜此夜衣を引き被ぎて狂い明かしたと幾度であつたか。

丁度靜江が病に罹る前日であつた。マダ淸見の二階を借りて居る時であつた。僕が丁度今の菊代の樣に、僕が起きた跡の蒲團の上に崩ほれて泣くのであつた。僕が試驗準備で急がしい時なのに、靜江が毎日、僕の側に離れずに付き添ふので、其前夜痛くも母に意見されたのであつた。當時な校規則嚴重なる高等の女學校の生徒であつた靜江に對しては、母の意見は決して不當では無かつた。靜江は其時二十二歳であつた。

「私だつて此歳になつて、少しは分別もありますわ……」とは靜江の怨みであつた。「けれど親切な母の意見――殊に其尤もな意見には、私や死ぬ程苦しう御座いました」とは彼女の赤心より溢れた言葉であつた。

其靜江が懐きついて泣いた夜具、其涙に浸された枕、いま菊代が問えの侶伴まで委せられたのが、眞實其れである。思へば奇しき因緣なるかな。菊代の髮は少しく亂れた。透徹つた樣に白い兩頬をキリヽと引結んだ紅の唇、涙の玉を宿した長きマツ毛稍々狹くして白き額にクッキリと正しく描いた黑き眉。氣品よりすれば靜江に劣る數等ではあるが、艷妍たる其美に至つては甚だ人に勝れて居る。

「菊代さん」

「ヘイ……」

「起きなさいな」

「濟みません」

「何に…、そんな心配は入りませんが」

「眞實に、何と言ふとでしやうね」

「…詰らない、くよ／＼お考えなさんな」

菊代は涙を拭ふて、眼を開いた。其眼は明星の如く輝いた。其が磁石の如くに僕の心情を強く牽く。

「貴方など男ですもの是から幾らでも樂みがありますわ」

「私程不幸な人間がありますか」

「けれど男の方は宜いわね、私、貴方の樣な兄さんでも有つたら、さぞ氣強い事でしやうに……」

吾が胸には再び洪波が狂ひ起つた心の樓は挫けんばかり。吾が綱や絶つか。彼女の引力や強きか。媚ぎ寄する風は息まぬ。淸き雪か濁る雨か。唯だ雲は足早く動いて居るわなゝく僕の腕は忽ち菊代の手首を握つた電光一閃

「菊代さん」

「………」

其時階下の戸がガラリと明いた。

「花岡君内ですか……」

僕は直ちに梯子段を走り降りた。（完）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

喜劇
伯父か甥か（三）

シルレル作
神崎沈鐘譯

第五場

雅子、大佐夫人英子、富士武夫

雅子「アラ、伯母様、速く被入い伯父様のお歸りでございますよ。」

英子「何です、……大佐様が歸つた、オヤ大層早いのですね、今日や明日にお歸り遊ばすとは夢にも、道中は別にお變りはございませんでしたか、オヤ安さんは　要さんはどうなさいました、馬車の音も聞えませんでしたが、どうなさつたんでせうね、出脫で何だか狐にでも摘まれたやうだわ、嬉しいのと吃驚りしたので。」

雅子（密に兄の耳に口をあて）「早く、早く何とかお話しなさいよ。」

武夫「大變なことになつた、それで急いだものだから傭ひ馬車——ア、、今度のやうな旅はしたてとがない、英子、無事で歸つたのが、マア幸福せなんだ。」

英子「えッ——大變なとは——それは何かお身の上に——。」

武夫「俺では無いが——此の結婚は（雅子の方を向き）雅子、伯母様と少し話がわるから、お前は暫く彼方に控へておいで」（雅子去る）

第六場

大佐夫人英子、富士武夫

英子「貴方、此の結婚は——とは何うなさつたのでございます。」

武夫（頭髮を掻つゝ）「ムウ……菊江の結婚は駄目だ。」

英子「えッ、そ、それは亦何う云ふ譯で菊江ゥ可哀さうではございませんか。」

武夫「それや可哀さうだ、親の心になつて見れば。」

英子「さう云ふ譯か、どうぞ其の譯を。」

武夫（強き調子で）「其の譯か——其の譯はね、ムウ、其の譯は妻が死んだんだ。」

英子（驚き）「えッ、死ました、眞に死だの、でございますか。（嘆く）」

武夫「悲しいことにや、若い者に在勝ちのことであるが、或る晩のこと舞踏會に行つて、美しい、可愛い娘と手を取つて舞踏して居ると、其處に競爭者が居て、二度も三度も侮辱したりするので、妻も酷く憤つて喧嘩をふつ始めたが、何しろ喧嘩を職業にして居る放浪漢共であるから適ふ筈が無、たうとう胸部に三ヶ所の傷を負て死で仕舞つた。」

英子「飛でも無いことになつたものですね、嘸澄間さんもお力落しでございましたらう。」

武夫「おやぢばかりか、お袋だつて涙の種の盡る時は無い。」

英子「奥様は去年の春にお亡なり遊ばしたではございませんか。」

武夫「さうさ、去年の春は妻を亡し、今年の夏は伜を亡したので澄間の愁れ方と云つたら、眼も當られん、時に職務が忙しいので二十日までに行かなくちやならんが、エ、、今日は十九日だね、ちや今晩出發して聯隊に歸らなくちやならん。」

英子「今晩お立になります　其はあまり。」

武夫「何、何、國家の干城では無いか　菊江は何うして居る。」

英子「貴方がお立になつて此方と云ふものは何だか鬱いでばかり居ます。」

武夫「鬱いで居る、ちや結婚が氣に食なかつたのかも知れん。」

英子「さうかも知れませんね。」

武夫「もう十五歳にもなつて居るんだから吾々が約束する前に、彼に選ばせなかつたのが、惡かつたのかも知れん。」

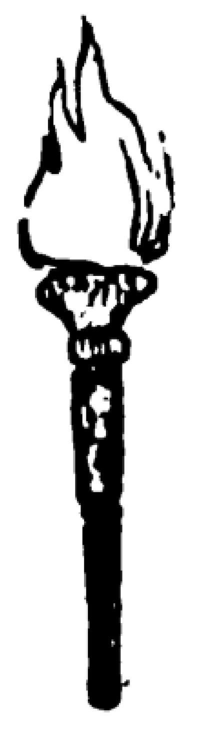
英子「さうかも知れません。毎日ですもの。」

武夫「結婚は決して無理に押付けるものではない、總て本人の自由に任して置なくちやならん。」

英子「左様でございます、皆神様の御心にお任せ申しませう」　（つゞく）

もだへ

可笑



○
我が心花ともなりて美くしき君か瞳に
日毎くらさん

○
流れ來て寒き双頰に寄する玉のみなも
と知れりや君は

○
君はしも何を思ふかうるみたる瞳の玉
に我おのゝきぬ

○
ともすれば血汐わき湧く心の臟破烈も
すやと我おのゝきぬ

○
偽つける胸を小琴に喩かして低ふも謳
する君が詩かな

○
堪え兼ねて兩つの眼とぢたればなほも
うつれる君の御姿

○
破傳ひ汐干に遊ぶ少子らの髮の縺れ毛
春風なぶる

○
色あせし寫眞抱きて春の夜をさめ〴〵
泣けるうら若き人

○
徒然に硝子の窓に愛の息かけては書き
ぬ君の御名をば

○
燃ゆる胸消せども消へぬ若き男の手帯
の水に身をば投げけり

消息集

△内山愚童君　四月の世界婦人にものせられし「哲學を棄てよ」は大いに吾等の意を得たり、其佛教を批評せし點は　いさゝか門外漢の杜撰を免れず、されど大體に於て評鍵なかりし」イヤ僕はこんなことを言ふては居られぬ、内外の壓迫に止むを得ず明十五日早朝、第二の故鄕たる函嶺の居所を去らねばならぬ、一度東京へ往て御相談も申したかつたが、今は其時でない、居所定り次第御報道をする、それまでは、雜誌の送附を見合せて置いて下さい　さらば、福田女史にも宜しく（十四日、石川宛）

△田中正造翁　御一閲は是非々々拜眉を存詰居り候處、來る十日谷中の裁判用に迫られて急歸村、只今古河町マデ（又此雨天で）東京滯在四十五日間で殆んど寸功なしとは……而も又何事をも爲さゞれば數十萬人の生命は早くちゞまるので、たとへ寸功はなしとするもやらねばならず、辛らくも御蔭を以て幾分の人民壽命のつなぎにはなりました（四月六日）

△鈴木重餘君　實に好い時候に成りました世界婦人卅五號御送に預り、今日往復の電車中にて有り難く拜見仕候、社說「哲學を棄てよ」小生の愚のに聊か腑に落ちぬ所有之候、他日親しく教を乞ふ節わらん樂しみ居り候、無垢助君の「福田女史に與へて云々」の一章、近頃我意を得たるものと喜び候（四月十日石川宛）

△小野有香　石川さん、驚くでしたね、その暫くの間に大々的宗教家になりましたね　イヤヘヤあの氣焔の凄じさつたらありやしませんよ「科學は新なり、宗教は火」なるが故に氣焔の揚がるのも尤もですね、併しカントやクロムウエルを罵倒すてとが如何に激しくとも、畢竟死屍に鞭つのみにて先づは無難なれども、仲や伊藤や乃至カイゼル罵倒論に至つては少々ならず危險々々。こゝを看ゝ取られた兄の眼光！感々服々（四月十二日后二時）

△西川文子君（岐阜）　私用事あり、京に登り候　幾年かけて見し嵐山のけしきは、うき心ある身にもわかすうるはしとながめられ申候、しかし人の多きには閉口致候、不景氣など何處を吹く風とやら申候に候「花おぼろ　松みどりてき嵐山、君ゆかしとはおぼしめさすや」（四月十六日）

▲藤森はる子君（岡山）　おつゝ〳〵暖く相成申し候處、如何御消光遊ばされ居候や、御伺申上候、嘸かし世界婦人御發行のことにつき御苦心遊ばされ居らるゝ事と御察し申候先般は又御母堂様逝去の由紀念號にて承知仕候何どもの御悲みの申上様なく候、私も先般姉を亡ひ候間一層の感を深く致申候、此上に何卒御身御大切に遊ばされ、主義のため　吾等婦人の爲、御健在にあらむことこそ我等の願にて候なれ（四月　日福田宛）

△長加部寅吉君（群馬）　石井間なんといふ恐ろしい悶々に攻められては、本當にかなひますまいね。そうでなくてさへ我が黨の雜誌など損ばかり、立つてるのに本當に〳〵お察しして居ます、私などは昨年あんなものを發行して經驗があるので、本當に人事とは思はれません、眞に獻身犠牲の決心がなくてはとても出來ないこと、深く感謝して居ります（四月十二日福田宛）

△宮崎平吉君（長野）　維持御困難の由　お氣の毒に存じます、然るに久しく前金切を其儘にして打過ぎ、汗顏恐縮の外ありません何ぞかきたいもの、ですが、鉛筆算盤以外手にすると無き君等の鈍物なれば、ガラになき事は思ひ止るとこそ宜しかるべくと…し申ます（四月十日福田宛）

△伊藤那信（周防）　毎々世界婦人御恵送被下難有存候、御陰によりて貴姉並に御同人の方々の御消息を常に知悉することを得て嬉しく存候、軟弱阿世の徒、滔々として世にはびこる今日の時、多年一日の如く主義の爲に御奮闘之事、大に人意を強うするも、有之候（四月十七日福田宛

△大和田忠太郎君（信濃）　御送附の空穗先正に到着　一讀しましたが、尚精讀いたし度きに就き　三週間許り御貸與被下度　右御願旁御依賴申上候　去二月下旬所用にて新宿まで參りしに付種々御話承り度と存じ御尋ね申上し所御住所見當らず終に殘念ながら其儘立歸り申しました（四月十三日石川宛

△守屋武夫君（肥後）　三井鎌吉君は去る三月廿日遂に永眠せられし故、世界婦人は以後小生宛御發送被下度（四月十四日）

△川合さくの君　いつもながら世界婦人によりて多大の勵みと慰めとを得候て深く〳〵感謝いたし候、何卒貴紙の上に神の祝福豐ならんことを祈り奉り候、かしこ（四月十九日福田宛）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

動物の相互扶助（二）

クロポトキン著　石川三四郎譯

▲クッスレル教授の主張

一形式なる一部の學者の如く、クッスレルは彼の生存競爭てふ文字の濫用に對し―少くとも之が自由に對し―反抗せざるを得ざると感じた。彼曰く、動物界及び人間に於ける不斷の鬪爭は、彼等の所謂無情なる生存競爭法則を常に示す、と。乍併、彼等は忘却して居る、他方に於て相互扶助法則をも認むべき一法則を有し、而して少くとも動物に對しては前の生存競爭法則よりも遙かに本質的なるを。彼は示して居る子孫永續の必要が如何に必然的に動物を合同せしむるかを、又各個が合同を保持すればする程、彼等は益々互に扶け合ふとになり、而して有機的に調和たる資格は益々高くなり、其智識の發達も更に歩を進むるに至ることを彼は何時も示して居る。各階級の動物殊に高等なる動物は相互扶助を實行すと而して彼は兜蟲の地下生活や、鳥の社會生活や、類人猿の生活の實例によりて、其思想を説明した。素より短日間の公開講演にての事なれば、其引例は甚だ僅少である、が、併し其重要な點は明瞭に指示せられた。而して博士は、人類相互扶助の進化が何は一層卓越せる點に到達したとを述べて、次の如く結んだ。

「予は容易に生存競爭を否定するものでは無い、乍併予は、動物界殊に人類界の進歩的開發が、相互鬪爭よりは寧ろ相互助力に待つと甚だ多きとを主張するのである。……總ての有機物は二個の必有的要求即ち生育及び種族繁殖の要求を有する。前者は彼等を競爭及び相互排斥に趣かしめ、種族保存の要求は彼等をして、互に接近し互に扶助するに至らしむる。乍併予は、有機界の進化――有機物の進歩的變革――に於ては、個生間の相互助力が、其相互競爭より遙かに重要作用を及すとを思はざるを得ない。」

▲シェヴエルツオフ

上説の正理は、露國現代の動物學者を痛く刺激し、含學者、地理學者間に有名なるシェヴエルツオフは倚は少しく多數の實例を擧げて此説を助成し且つ説明した、彼は鷲の例を引きて、其殆ど暴略の爲に結合する種族が滅亡に趣き、而して相互扶助を實行する種族が繁昌するとを述べた。「他方に於て、社會的片猫なる鷗を見よ、素より其鬪爭は甚だ少數である。乍併、彼等は相互助力を實行する、而して、其變化と種類とが無數に存するによるも判る如く、殆んど地球を併呑して居る」とは彼の記する所である。

▲露國動物學者の特徴

露國動物學者がクッスレルの説を承認すべく用意するは素より自然の結果である、蓋し、彼等の殆ど總ては、北亞、東露廣き無人境に於ける動物世界を研究するの機會を有せしが故である。而して之と同樣な地境を研究して、之と同思想に到着せぬといふとは不可能なのである。予は思ひ起す曾て動物學に熟達せる吾友ポリヤコフと共にオチム地方を探檢せる時、西伯利亞の動物世界より受けたる印象を。吾等兩人は「種の起源」の強き印象の下にあつたのだが、然も、吾等がダーヰンの著作によりて豫期したりし所の同種族動物間の鋭き競爭を見るとが出來なかつた、吾等は何れに於ても、層々反對的氣候狀態に對し、又は種々なる敵に對する爭鬪に應する現象を多く目撃した。而してポリヤコフは、肉食動物や反芻動物や齧齒動物が各其地理的分散に從ひつ互に相依るの事實に就て數ページを費した。吾等は相互助力の事實を夥しく目撃した、殊に鳥や反芻動物の移住期間に於て然るを見た且つ彼の動物生活の頗る稠密なるアムール及びウスリ地方に於てすら予が熱心に捜索したるに係はらず、吾等動物同種族間の競爭事實を發見するは甚だ稀れであつた、之と同樣なる印象は最多くの露國動物學者の著作中に見らる。されば、クッスレルの思想が露國ダーヰニストの歡迎を受けた譯は明白になつたであらう且つ此の如き思想が、西歐のダーヰン學徒間に行せぬとも了解せらるゝであらう。

▲最下級動物にも法則あり

吾等が生存競爭を研究し始むるや否や直ちに吾等を刺激する所の唯一の或者は、其露骨なる、又は、比喩的なる狀態を措て、相互扶助の實際に夥しく存するとの是である且つ此事實は、多くの進化論者の示するが如く、單に子孫繁殖を目的とするのみならず、個生の安全の爲に、又、必要な食物を獲へんが爲に行はるゝとの是である、動物世界の大部分に於ては、相互扶助は其法則となつて居る。相互扶助は最下級動物中にすら之を發見するとが出來る。されば吾等は、顯微鏡を以て細微生活を研究する學生よりして、時に無意識的相互扶助（微小有機生活中にすら存する）の事實に就て學ばんとを用意せねばならぬ。素より吾人の無脊髓動物の生活に關する智識（白蟻、黒蟻、蜂を除き）は非常に限小せられてあるが、然も術ほ其下等動物中にすら、確乎たる共働の事實を少しは拾集するとが出來る。蝗や、紅蝶や、蟬や、シ、ンデラ等の無數の團體は實際には未だ全然討査せられて居ない。乍併、彼等の存在の事實其ものが既に蟻や、蜂の移住を目的とする一時的團結と同質の意を以て彼等が結合せるものなるとを示して居る。

▲兜蟲の相互扶助

兜蟲に就ては吾等は、彼の地下兜虫中の相互扶助の事實を可なり能く觀察した。彼等は其卵子を放付くべき死せる有機物を要する。是其子蟲の爲に食物を準備し置くのである。併し其材料は餘り速かに枯れてはならぬ。故に、彼等は時々探偵中に發見せる有ゆる小動物を地下に埋めるのである。普通としては、彼等は孤獨の生活を爲す、乍併、若し其中の一匹が鼠か鳥を發見し之を獨りにて埋めると困難な時は、協同一致して之を處分せんが爲に四匹とか六匹とか或は十匹とか、都合によりて他の兜蟲を呼で來る。必要ある時は、彼等は其屍骸を適當な軟かい土地に運ぶ。而してそれを頗る注意深き方法を以て埋める。而して其埋められたる屍骸に卵子を放付ける特權が誰に屬するか杯といふとに就て爭ふとは無い グリヂッチが、二本の棒で作つた十字架に死鳥を結付けた時に、又は、地に立てた一本の棒に一の蟇を吊した時に、小さき兜虫等はヤハリ仲善く一致して、人間も及ばぬ智慧を絞り合ふのであつた。

▲蟹の相互扶助

有機組織の更に稍々下級に屬する動物中にすら、吾人は之と同樣なる實例を發見することが出來る。西印度及び北米の陸蟹は其卵子を海中に放下けんが爲に多大の旅行群を組織する。而して其移住は一致協同共助を以て行はるゝ。大モルッカ蟹に就て、予は其多大なる相互助力の事實を目撃した、一八八二年ブライトン水族館にて）此不器用な動物も必要な場合には斯く其同胞に助力を與ふる能力を有するのだ、一匹の蟹が槽の一隅に仰向に轉んだが、其重いソウス皿の樣な甲の爲に起き直るとが出來ぬ、且つ其の槽の隅にある鐵の棒が妨害をするので益々困難である。ソコに其同胞が救助に來た。予は彼等が如何にして其囚はれた一同胞を助けんとするかを一時間も見て居た。先づ一度に二匹出て來て其友を下から押した。そして非常な力を以て暫くの間之を起き上らせようと努めた。併し鐵の棒が其救助事業を防害するのであつた。稍々と計劃して見た後、一方の救助者の槽は中央の深い底の方へ行つて新たに二匹の蟹を連れて來た。而して其新手の力を合せて再び其倒れな同胞を押し起し始めた。吾等は其水族館内に二時間餘も留まつて居た。そして歸るに臨んで再びチヨツト其槽を見やつた時、救助事業は尚ほ繼續せられて居た。此事實を見て以來、予はエラズマス・ダーヰン博士の觀察を信ぜざるを得なくなつた。エラズマス・ダーヰン博士の觀察は即ちコウである、「普通の蟹社會の脱甲期間には未脱者或は硬甲者等は、其無防禦狀態にある脱甲者を害せんとする海中の敵に對して番兵として屯營する」

消息集

▲奥谷文智君　一体に近頃は紙面が引締まりて頗る心地よく小生は社會主義に大なる趣味を有するものなれ共社會の表面に現はれたる「運動」としての社會主義よりも人生の根本義に「觸れたる」社會主義の方が更に大なる價値有之やと愚考仕候近頃の迫害によりて日本の社會主義も非常にシンミリとしたる狀態を呈へしやの觀有之候、表面の運動は如何に大なればとて根底に觸響するものにあらず、根底の一微動は全面を動かすに足る、過去に於ける日本社會主義の歷史は後者にあらずして前者なりき）乞ふ今後の日本の社會主義をして後者あらしめよ更に「觸れ」しめよ沈痛ならしめよ、根底あらしめよ、これ貴社の責任あらかと存じ候。

▲峰岸正太郎君　久しく表面運動から遠いた身は諸氏が不相變の御奮鬪の御樣に何となく懐かしく感じました、併し生も御存知の如くポツ／＼働て居りますが生は少くとも議論より實行―少々生意氣な言ですが―今は正に其時代だろふと思ひます、促て御承知の如な御蹴々遅りましたが、機關紙とても御覽の如く實に懐かしい次第です。（四月廿二日石川宛）

排哲學に就いて

（石川大先生の敎を請ふ）

かの子

（一）

突然ながら一筆しめし參らせ候。妾事未だ大先生にはお目もじの榮を得ざる一個無名の本誌愛讀者に有之候へども、多年密かに大先生を景慕致居候者に御座候、いつかは上京お目もじの上心ゆくばかり御高見御伺いたしたく、今は身も靈も浮世の憂き羈絆に囚はれ居候身の唯それのみを希望の星と仰ぎつゝ夜な夜なの愚痴と致し居り候。其節妾の悉しき素性も本名をも聽え上げ申すべく、夫れ迄は匿名の無禮平に御容し下されたく斯上げ參らせ候。

さる處此度「哲學を棄てよ」との御論旨いつもながら御尤もと只管感心致居候。我が先生でなければ彼の樣な男らしき痛快な議論は出來申さず、あらゆる權力に屈し學閥に囚はれ候世の所謂學者論說家のいかで企て及ぶ所にて候はむや。此點に於て一入推服の度を高め申候事神かけて嘘いつはりは御座候はず候。

（二）

併しながら此「併しながら」と申す言葉は至つて短かき語に在し候へ共、天地をも顚覆致し乾坤をも轉動致すべき力を含み居候樣承り居候。妾の今用ひ參らせむと致候「併しながら」は夫れ程迄の力は無之候樣ため御安心遊ばされたく念じ上げ參らせ候。

大先生の仰せられ候「哲學は死學なり」との御高見には異議無之候。但死學は哲學のみに限らず凡ての學問皆之れ也と信じ居り候。唯大先生と妾との異見の差點はこゝにて候。即ち大先生の說によれば哲學のみ死學也、髑髏也、死也、水也、故に危險也と宜へ共、妾の意見（意見と申す程の事も無之甚だをこがましく、夫れこそ先生より、「今日の婦人などか譯も分らずに髑髏を抱かんとする大馬鹿者」とのお叱りも有之候はむなれども）は之に反し凡ての學を死物也影也と申したき點にて候ふ。

妾の考へ候所により候へば哲學は鐵學也と申したく候。哲學はどういたせ死物にて候。唯生ける人間の活力によりて人世最高の學問と相現はれ申候。鐵學も之れと同じく鐵は無生無情の一個の無生物　一塊の金屬にて候。さはれ人間の活力によりて鍛へらるれば或は正宗の利刀となり、研かざれば或は土塊と何等の撰ぶ所なき汚物となり候はむか。妾は私かに考へ居候人生萬事鐵に就いて學ぶべしと、活用するとせざるとは人間の事　彼等無生物の與り知らざる所に候はずやと。

さるが故に鐵學の稱有之候所以にて候。

（三）

哲學に對する妾の愚見は大先生のそれに對する高見と稍其趣を異に致し居候、かく申上ぐれば如何にも臆面なきあばずれ女よとの御咎めも候はむなれど、妾も纖弱き世の常の女性、羞恥と躊躇とは妾を緘默の淵に引張り引張り候へ共、一般女性に關する一大事、已むに已まれぬ今日の仕誼、出射張り者よとの御批難は素より覺悟に候へ共こゝに至りし妾の苦衷御憐察たまはり度偏に念じ上參らせ候。

大先生は哲學を槪念の學にして、槪念は抽象の念なりとの御斷定、妾も敢て異議は唱へず候へ共、但書に統一的槪念なりと申したき事にて御座候。而かもまた「抽象は物の影の如し、影に何の生命ありや」との御高說には甚感服致兼ね候。

哲學は究理の學にて候、大先生が所謂抽象の念にして又考察の學にて候。妾は哲學を目して大先生が所謂「屍」とも思はず「影」とも考へず、却つて肉體に對する「靈魂」（精神）の地位と見立て、かく確信いたし居候。「靈魂」（精神）のなき所如何に肉體强健なるも瘋癲白痴以下の畜のみ、何ぞ尊ぶべき所以を知らず候。

「影」と見るが故に空にして何等の生命無之候へ共、若し之を「靈魂」精神）と見ば大に其趣を異に致し候はずや。哲學果して影なりや、否々、斷じて否、哲學は究理の學にして又統一的槪念にて候。統一的槪念なき所そこに何の眞生命が有之候はむ。科學も宜しく、實學も妙にて候へ共、究理を外にし統一的槪念を度外視して能く人生の目的に適合せしむるを得候はむや。人生の意義目的に對して何等の考慮を費すことなくして（敢て意義目的を知らずしてとは言はず）何處に政治有之候や、婦人解放有之候や、將又科學宗敎有之候や、若し有之とするもそは偏りたる人間階級に候、走屍行肉百鬼夜行の修羅場にて候。

（四）

大先生は斷言して曰はるゝやう「宗敎の生活は「信」より始まる」と。妾も而か信せざるには御座なく候へ共、初より絕體の信を得たるものは之れなかるべく、神を疑ひ佛に惑ひつゝ彼岸の光明の幻影を追ふて煩悶精進する所そこに猶且宗敎的生活は無之候や、此の如き疑惑の狀態すら之を宗敎的生活の第一歩と申したき妾の存念は謬りにて候ふや、高見如何、偏に御示敎をお待ち申上候。

且宗敎的生活とは申せ、造次顚沛、須臾も信を失ふことなき絕對の信は殆んどあり得ぬが弱き人間の憐むべき常態にては候はずや。

哲學は全く「疑惑に」其源を發し一より他に疑惑を追うて理を究むるもの、常に疑惑圈裡に沒頭至すべき者に有之候へ共、一の疑惑より他の疑惑に其究理の歩を進むるにわたり候は、其處に一個の「信」の影を認むることを得べきにて候。換言致候へば、斯く疑惑より疑惑に理を究め行くうちには解決の光明必ず燦然として八紘に輝くべしとの信念に喜び勇んで雄々しくも常に疑惑圈裡に沒頭致得候。若し此信念なくして哲學に指を染め沒頭せむとする者こそ、大先生が所謂「無益の贅物に携はる者に」て妾の取らざる所にて候へ。

●發行延引の御わび

本號の發行は期日より十數日後れました。誠に申譯ありません。實は編輯局の方は早くから手廻はしゝて原稿を印刷所に送つて置いたのですが、印刷所の方に不意の故障が起きて遂にかく延期した次第なれば、寛大なる讀者の御宥恕を願上ます。

●金百圓の罰金確定

本紙第廿八號被告事件は去る十一日大審院判決を以て罰金百圓の事に確定せり、此段同志讀者諸君に御報告申上候本社財政頗る困難、前金切の諸君は滯り無く御拂込を乞ふ。

外國語學校敎授　平井金三先生著
心靈の現象
定價四十錢（郵稅六錢）
天眼飛行傳心心讀器物飛揚鬼神出沒等の現象研究に關し平井先生造詣甚深く今之を詳說す殊に醫藥無き治病强健法を說く處萬人必讀の項目にして懷疑の者此書を眞不思議力あるに驚かん讀み宇宙に
發兌　東京尾張町　振替東京五五三　警醒社商店

涙紅醫院長
醫士　一瀨鷹一
一院　日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院　神田區連雀町十八番地
學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又は無料

小兒科
內科
婦人科
每日　自午前八時　至午後六時
淺草區馬道町三丁目
小牧醫院

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新小說

第拾四年 五月號

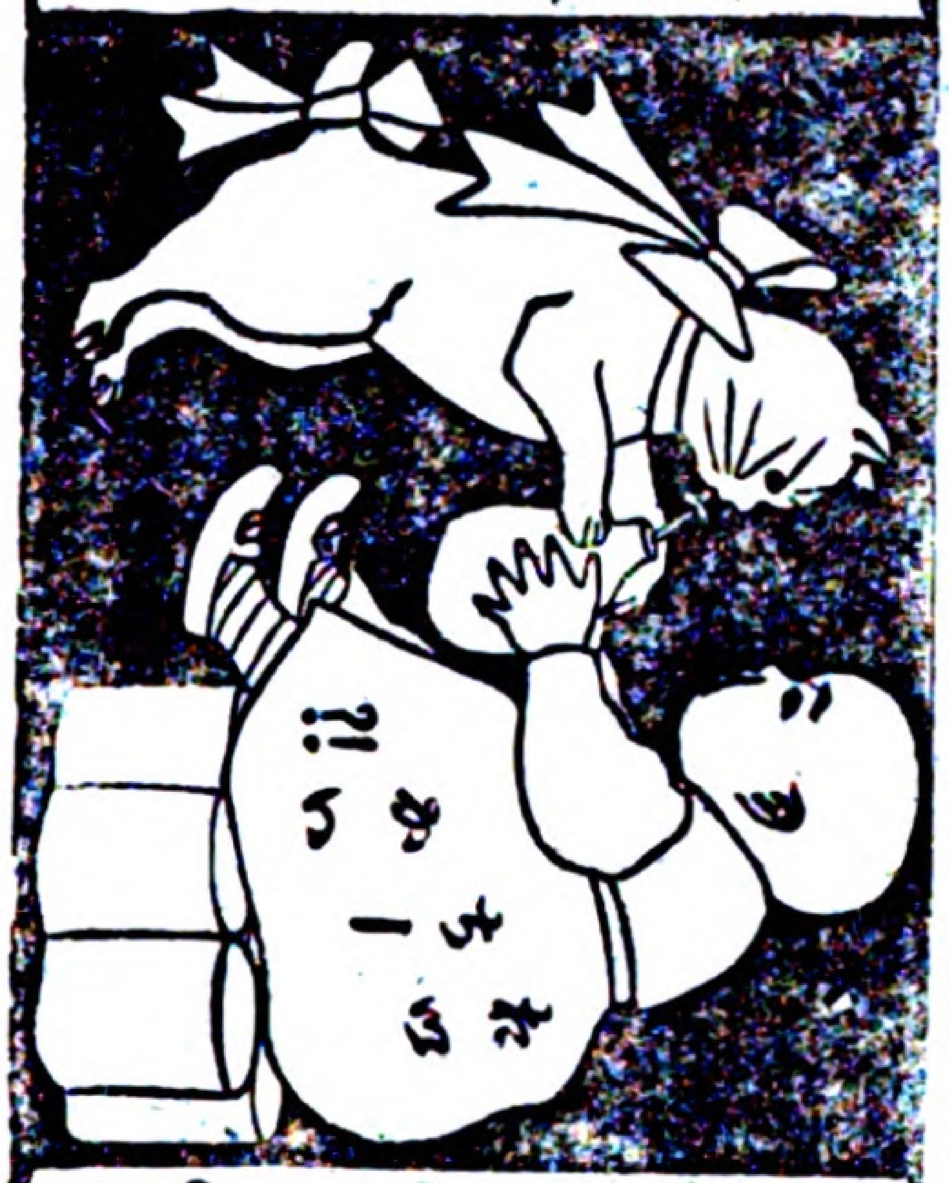
表紙繪……和田英朋
口繪……渡部審也
口繪……井川洗厓
外英泰美朋（寫眞版）

價金廿五錢稅二錢
五厘切手一割增

東京市日本橋 春陽堂

小宰相局……山田美妙
途中……小山内薫
幽靈物語……吉野臥城
一擊……鐵幹蘭々
（時文）自然主義の殘壘……宙外
小アイヨルの面影……淺羊
●朱環 女史の離婚問題……有美
●近代的の意義……戶川秋骨
マルセルプレボウ……馬場孤蝶
●評論の價値……田中喜一
●室内の裝飾……吉田博
●東西の美術……岡崎雪聲
●寸鐵數十項
▲戲曲雜考……齊々閑
▲讀書餘錄……孤蝶
▲亂言冗語……津田斬雲
▲遊神夢魂術囈……月
▲芝居歩き……春月
▲夏帽と節句飾……流行子
●西洋洗濯法……吉川教授
魚肉の目利……萬華生
●猿若の狂言……春錦
●點茶の用意……枯華
●花の札……斜汀
●養老院……胡蝶園
●四月號の各雜誌月旦

發賣元 東京市日本橋區大傳馬町 淺見山陽堂



伊豆三島 花島藥院謹製
名譽ある 御國ミルク

瓦斯の應用

燈火

白晝の如く、黄と白とを見分くることが出來る位、光力か强う御座います。普通用ひられて居るものは五十燭光で一時間の瓦斯代が僅か四厘しか入りません。

瓦斯竈

御飯なれば二升が十七分間で出來、瓦斯代一錢四五厘、御湯なれば四五分で沸きます。殊に竈は月三十錢の損料で御貸致しますから、至極お手輕であります。

東京瓦斯株式會社
神田錦町

著作者大橋筆君 裁判所書記

實用登記申請案内

一部代價附錄ヲ除キ金拾錢（郵稅不要）
三部以上一部九錢五部以上一部八錢

附錄 實用大橋式登記申請用紙
（紙質上等美濃紙）

第一號	所有權保存登記申請用紙
第二號	所有權移轉登記申請用紙
第三號	地上權設定移轉登記申請用紙
第四號	永小作權設定移轉登記申請用紙
第五號	賃借權設定移轉々貸登記申請用紙
第六號	抵當權設定登記申請用紙
第七號	抵當權抹消登記申請用紙
第八號	登記名義人表示變更々正登記申請用紙
第九號	登記事項變更々正抹消等登記申請用紙
第十號	不動產表示變更々正等登記申請用紙
第十一號	謄本抄本交付申請用紙
第十二號	閲覽申請用紙
第十三號	継續用紙（不動產表示用）
第十四號	登記義務者の保證書用紙
第十五號	委任狀用紙
第十六號	賣買證書用紙
第十七號	借用證書用紙（前用紙後用紙二枚一組）
第十八號	領收證書用紙
第十九號	確定日附交付申請用紙
第二十號	印鑑證明願用紙
第廿一號	白紙用紙　一枚ニ付壹厘五毛
第廿二號	継續用紙　一枚ニ付四厘但五百枚
第十九號	（普通用）以下四厘五毛

定價 一枚ニ付

五百枚マテ	六厘
千枚マテ	五厘七毛
三千枚マテ	五厘四毛
五千枚マテ	五厘二毛
一萬枚マテ	五厘
一萬枚以上	四厘五毛

郵稅概算表

枚數	郵稅種別 普通小包個	代金引換小包
三十枚マテ	二錢	
六十枚マテ	四錢	
百枚マテ	六錢	
二百三十枚迄	八錢	十二錢
五百枚マテ	十二錢	十八錢
七百五十枚迄	十六錢	二十四錢
千枚マテ	二十錢	三十錢
千二百八十枚迄	二十四錢	三十六錢
千五百枚マテ	二十八錢	四十二錢
千八百枚マテ	三十二錢	四十八錢
二千枚マテ	三十六錢	五十四錢
二千枚以上	實費	實費

備考 代金引換小包便ハ別ニ引換料一包ニ付金十錢ヲ要ス

見本 振替貯金又ハ三錢以下ノ切手代用ニテ金拾八錢送付アレハ申請案内共全部送付可致候
見本全部送付ス金貳拾八錢送付アラハ用紙

東京西紅梅町二十二番 駿河臺 神田
中庸堂
振替口座六三三〇

齒科治療
自午前八時 至午後十時

吉瀨齒科醫院

院主 吉瀨才一郎

東京市神田須田町二十六番地
（萬世橋内右横町）

●藥價手術料共半額
●貧困者施療

弊店儀一昨年來着々事業を擴張し改良し、西洋料理、ホテル業の外、廣く公衆の遊覽所を設け、衛生に注意し、風儀を高尚にし、貴顯紳士、御婦人御小供の御來遊に便利を計り、教育的圖書縱覽所まで開設致候、四方の雅客、希くは一日の淸遊を吝む勿れ。

洋食定價
△朝食 七十錢
△晝食 壹圓三十錢
△夕食 壹圓五十錢
△一品 三十錢

上野精養軒

自五月一日 至五月廿日

日延 春季天賞堂大賣出し

●御買求額五圓に對して景品商品切手百圓宛廿枚二等景品同く五拾圓宛廿枚（一本もカラクヂなし景品割合の詳細は三月廿日の時事新報所載御覧あれ）

●御買求額壹圓に對して景品商品切手廿圓宛廿枚二等景品同く拾圓宛貳拾枚（一本もカラクヂなし景品割合の詳細は三月廿日の時事新報所載御覧あれ）

◎定價 △一部六錢●十部五十五錢◎二十部壹圓△申込は總て前金の事｜發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 石川三四郎｜印刷人 東京市牛込區赤城下町五六番地 井口正之一｜發行所 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地 世界婦人社｜印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 博文堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY